

特115
911



始



長崎市

小學校創立五十年

記念帖

長崎市小學校職員會

持15
911

長崎市小學校

創立十五年紀念帖

長崎市小學校職員會編

大正
11. 6. 29
内交

長崎市小學校創立五十年記念帖目次

○發行之辭

○寫眞版

- 一、長崎市歴代區市長
- 二、長崎市歴代區市會議長
- 三、現在市會議員及學務委員
- 四、長崎市役所學務關係者
- 五、各小學校及幼稚園の校舍及職員
- 六、小學校創立五十年記念内外教育展覽會場及關係者

○長崎市小學校教育概要

- 一、往時の教育
- 二、學制發布と小學校創立
- 三、學制發布當時の市政及市況
- 四、學制發布以後の狀況
- 五、教育の思潮と實際の變遷
- 六、現今の學事一覽

○長崎市學事統計表

- 一、長崎市現住人口累年比較表
- 二、學校及職員累年比較表
- 三、學齡兒童及在學兒童累年比較表
- 四、長崎市歲出及小學教育費累年比較表
- 五、長崎市歲出及小學教育費累年比較
- 六、小學校及職員累年比較
- 七、就學出席及小學教育費の市費に對する百分比累年比較表

小學校創立五拾年記念帖發行之辭

學制頒布セラレ、學校ノ創立ヲ見テヨリ、茲ニ五拾年。日月ノ流ル、コト矢ヨリモ早ク、匆忙ノ間變轉極リナキガ如キモ、世ノ大勢ハ一定ノ樞軸ヲ辿リテ嚮途ヲ定メ、發展進歩シテ止マザルガ如シ。殊ニ我が帝國ノ隆盛ハ、眞ニ盛世ノ惠澤、天壤無窮ノ皇運ニ倚藉シテ、國民ノ等シク瞻仰スル所ナリ。況ヤ、過古五拾年間ニ於ケル長足ノ進歩ハ、儔ヲ他ニ見ル無ク、世界ノ各國、悉ク驚異ノ眼ヲ以テ羨望シツ、アルニ於テヤ。

我が長崎市ニ於ル小學校ノ創設ハ、實ニ明治六年三月十一日ニ在リ。爾來、今茲大正拾壹年ハ、歲次方ニ五拾ヲ閱スルノ故ヲ以テ、我が市當局ハ、之ヲ記念スル爲メ、「小學校創立五拾年記念内外教育展覽會」ヲ開キ、其ノ當時ニ創設セラレタル、勝山高等、同尋常、磨屋尋常ノ三小學校、及商品陳列所ヲ會場トシテ、締盟各國、我が租借地、本邦各都市、及縣下各郡等ヨリ、教育ニ關スル成績物、及考案研究等ニ成レルモノヲ蒐集シテ、之ヲ展覽シ、觀客實ニ貳拾萬ヲ超エタリ。殊ニ三月十一日ニハ、記念式ヲ舉行シテ教育者ヲ表彰シ、審査ノ結果褒賞ヲ授與スル等ノ盛典ヲ行ヒ、我が市民ニ、教育上發展進歩ノ縮圖タル懷古的印象ヲ與ヘタリ。

我が職員會ニ於テハ、會員悉ク展覽會ニ關係シテ一ケ年ニ涉リ努力精勵セルヲ以テ、意義アル過去五拾年ヲ表徴スル爲メニ、會員ガ展覽會ニ盡スノ精力ヲ減殺スルノ愚ヲナサバ、ルヲ期シ、然モ永久ニ當五拾年ヲ記念スルノ意ヲ發表セントシテ、種々考究セル結果、本記念帖ヲ作製スルノ舉ニ出デタリ。

我が市ニ於ケル教育關係者ノ寫眞ハ、過去五拾年間ニ涉リテ悉ク網羅スルコトハ大ニ希フ所ナリシモ、數量ニ於テ餘リニ多キヲ數ヘ、財政ニ於テ遂ニ及ブベカラザルヲ知り、區市長、及區市會議長ヲ除クノ外ハ現在ノ在職者ヲ掲載シタリ。

創設當時ノ學校ガ如何ナル狀態ナリシカハ、今日之ヲ見聞セル人アリト雖、繪畫ノ據ル所殆有ルナク、唯想像ニ依リテ發表セルニ過ギザルガ如ク、之ガ實寫ヲ掲ゲ能ハザルヲ憾ム。今ヤ我が長崎市ハ、學校施設改革ノ機運ニ遭遇シ、七ケ年計劃ヲ以テ、着々經營進捗ノ途ニ在リ。將來歲月ヲ經過スルニ當リ、本帖ニ掲ゲタル現在ノ校舍ガ、觀ル人ヲシテ、獨リ行人征馬ノ感ノミニ非ラザルベキヲ想ヘバ、本會ノ微衷又後昆ニ髣髴タルモノアルヲ覺ユルナリ。我が市小學校職員ハ、今ヤ四百ニ餘リ、年々ノ轉退者實ニ多數ニ達ス。各學校ニ於ケル寫眞ハ、落伍者ナキヲ期シタリト雖、時間ト天候トノ都合ニ依リ、遍ク人員ヲ網羅シ能ハザリシヲ遺憾トス。我が市教育ノ沿革等、全卷稿成リ、更ニ精査ヲ閲テ、十分意ニ充ツル能ハザル所ナキニアラズ。況ヤ之ヲ客觀スル人ノ本懐トセザル所、亦幾多ナルベキヲ想ヘバ恐懼措ク能ハズト雖、冀クバ、本會役員ガ驚馬ニ鞭チ、專心傾盡シテ、本記念帖ヲ成就シ得タルノ苦衷ニ免シテ、諒トセラレンコトヲ、

大正十一年三月

長崎市小學校職員會議

○長崎市歴代區市長



氏門崎左又田祐



氏郎九東長朝



氏行俊井金



氏長雅原北



氏郎一寅山橋



氏從信川北



氏一行崎高

○長崎市歴代區市長

自明治十一年十一月
至明治十二年一月
家永恭重氏 (寫眞無)

自明治十二年八月
至明治十二年八月
稻田又左衛門氏

自明治十三年九月
至明治十九年八月
朝長東九郎氏

自明治十九年八月
至明治二十二年三月
金井俊行氏

自明治二十二年五月
至明治二十八年五月
北原雅長氏

自明治二十八年五月
至明治四十年二月
横山寅一郎氏

自明治四十年五月
至大正二年九月
北川信從氏

自大正二年九月
至大正二年九月
薄定吉氏 (寫眞無)

自大正二年九月
至大正二年十二月
(事務管掌) 山宮鼎氏 (寫眞無)

自大正二年十二月
至大正十一年一月
高崎行一氏



西田仙一氏



高橋保馬氏



家永芳彦氏



松田源五郎氏



則元由甫氏



金井俊行氏



中泉半藏氏



野野正理氏



丸毛金造氏



藤原太助氏

○長崎歴代區市會議長

○長崎市歴代市會議長

(兼任再任ハ寫眞ナクセリ)

自明治十六年六月
至明治二十二年三月 西 道 仙 氏

自明治二十二年五月
至明治二十三年一月 家 永 芳 彦 氏

自明治二十三年二月
至明治二十三年二月 金 井 俊 行 氏

自明治二十三年十月
至明治二十三年十月 家 永 芳 彦 氏

自明治二十三年十月
至明治二十四年一月 高 橋 保 馬 氏

自明治二十四年一月
至明治二十五年一月 松 田 源 五 郎 氏

自明治二十五年一月
至明治二十五年四月 高 橋 保 馬 氏

自明治二十五年四月
至明治三十一年四月 家 永 芳 彦 氏

自明治三十四年三月
至明治三十四年四月 松 田 源 五 郎 氏

自明治三十四年三月
至明治三十四年三月 則 元 由 庸 氏

自明治四十一年一月
至明治四十一年一月 中 泉 半 彌 氏

自明治四十一年一月
至明治四十一年十一月 岡 野 正 理 氏

自明治四十三年四月
至明治四十三年四月 則 元 由 庸 氏

自明治四十三年四月
至大正二年八月 家 永 芳 彦 氏

自大正二年九月
至大正六年四月 九 毛 兼 通 氏

自大正六年四月
至現 今 重 藤 鶴 太 郎 氏

○長崎市會議員



氏吉太達伊 番一



氏那次健屋油 番四



氏那次弘島鶴 番七



氏助之甚塚石 番十



氏治庫本松 番三十



氏助要馬本 番二



氏次保瀬赤 番五



氏那實邊野山 番八



氏那次時田青 番一十



氏成可永下 番四十



氏市嘉川浦 番三



氏吉源野河 番六



氏吉長部隈 番九



氏信 谷高 番二十



氏那太新田淺 番五十

○長崎市會議員



氏郎五辰方緒 番八廿



氏嗣福尾中 番五廿



氏秀誠川中 番二廿



氏郎太鶴藤重 番九十



氏郎太豐 堀 番六十



氏郎八九神大 番九廿



氏郎十宅川相 番六廿



氏郎次久門長 番三廿



氏篤 森 番十二



氏治秀塚岸 番七十



氏雄久茂 原 番十三



氏作英田本 番七廿



氏吉泉山 番四廿



氏郎太徳見永 番一廿



氏太郎四野舞 番八十

○長崎市會議員 (四十二名)

議長

重藤鶴太郎氏

副議長

松本庫治氏

市參事會員

山野邊寅雄氏

同

隈部長吉氏

同

淺田新太郎氏

同

山口泉吉氏

同

高木義貴氏

同

松本梅三郎氏

○長崎市會議員及學務委員



氏郎太喜岡長 番十四



氏六嘉田黒 番八世



氏一郎善山小 番六世



氏郎三藏田黒 番四世



氏吉壽田岡 番一世



氏郎三梅本松番一十四



氏郎次直田本 番九世



氏男義野多波 番七世



氏一眞 原 番五世



氏貴義木高 番二世



氏夫種山杉 員委務學



氏治孝野北 員委務學



氏眞 方眞 員委務學



氏作藤土宇 員委務學



氏三榮 林 員委務學



氏郎太郎元則 番三世



學校學

氏郎西友田柿



上務務學

氏明 本山



助 助

氏敬 岡 曾



學 視

氏鑿 塚 大



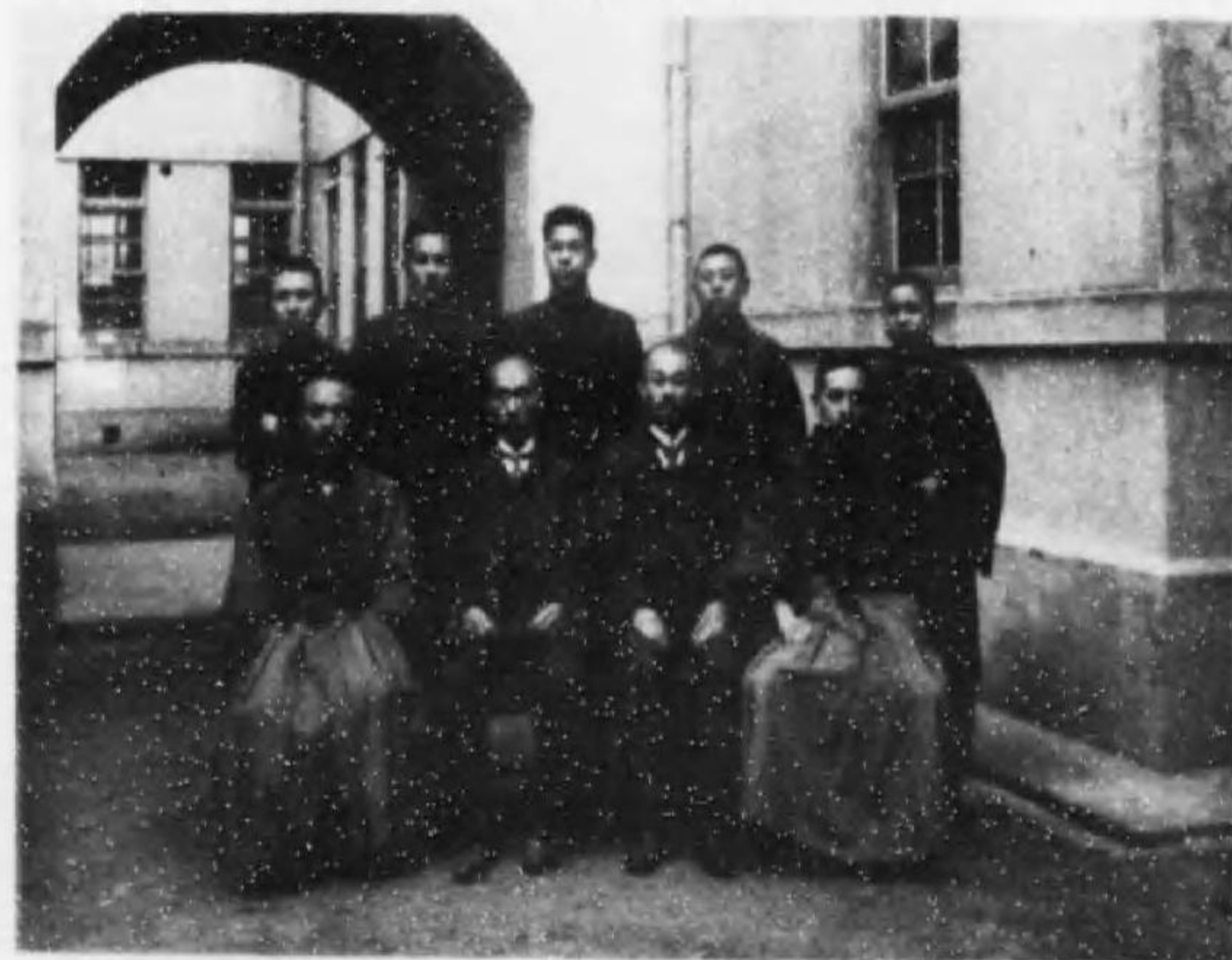
學 視

氏郎三城口關

○長崎市役所學務關係者



氏郎大淵 崇



同一員課務學



學 視

氏三哲崎正

杉山種夫氏
北野孝治氏
眞方猛氏
隈部長吉氏
宇土藤作氏
中川觀秀氏
林榮三氏

〔九番市會議員
三提出〕

〔廿二番市會議員
三提出〕

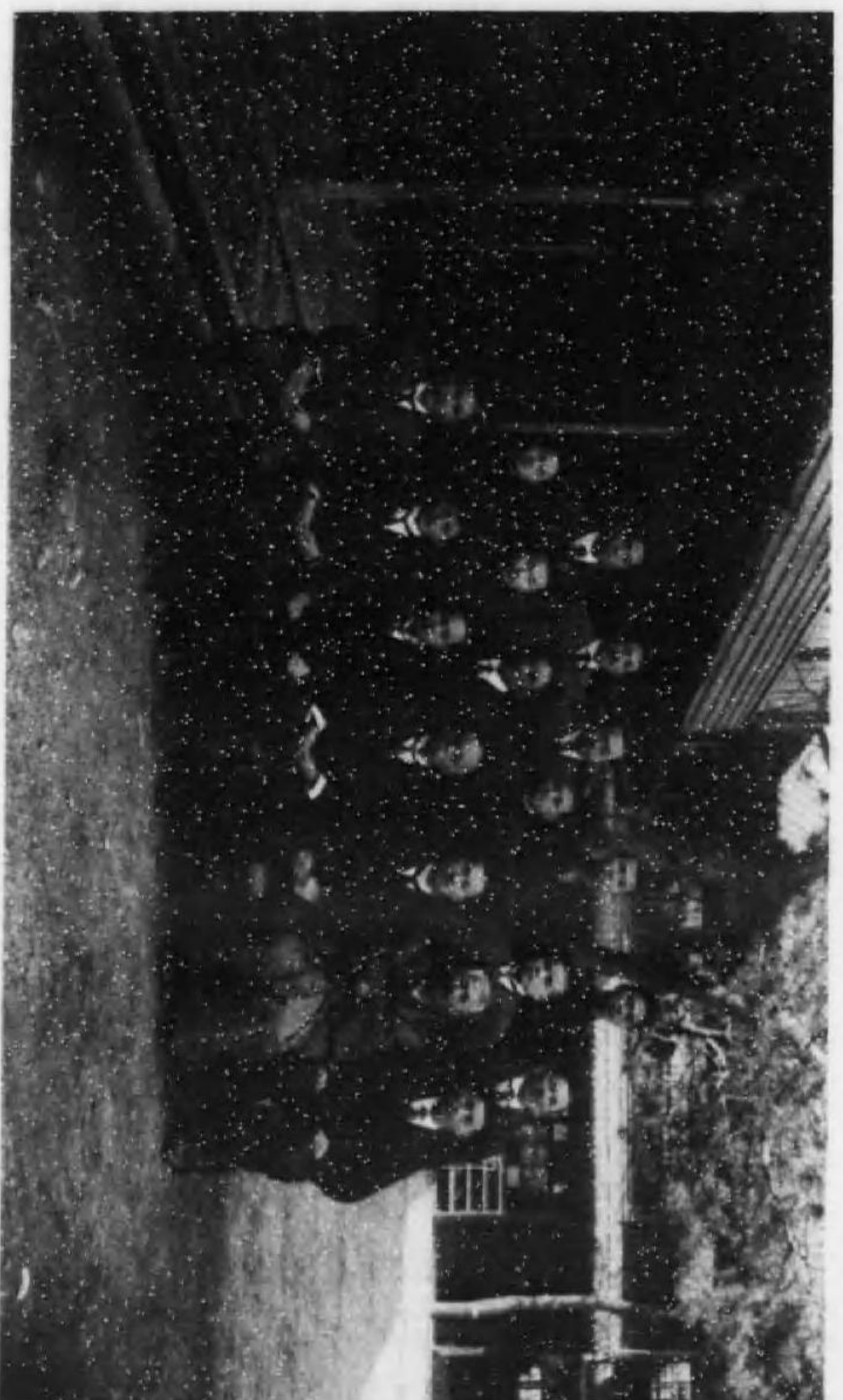
長崎市學務委員七名

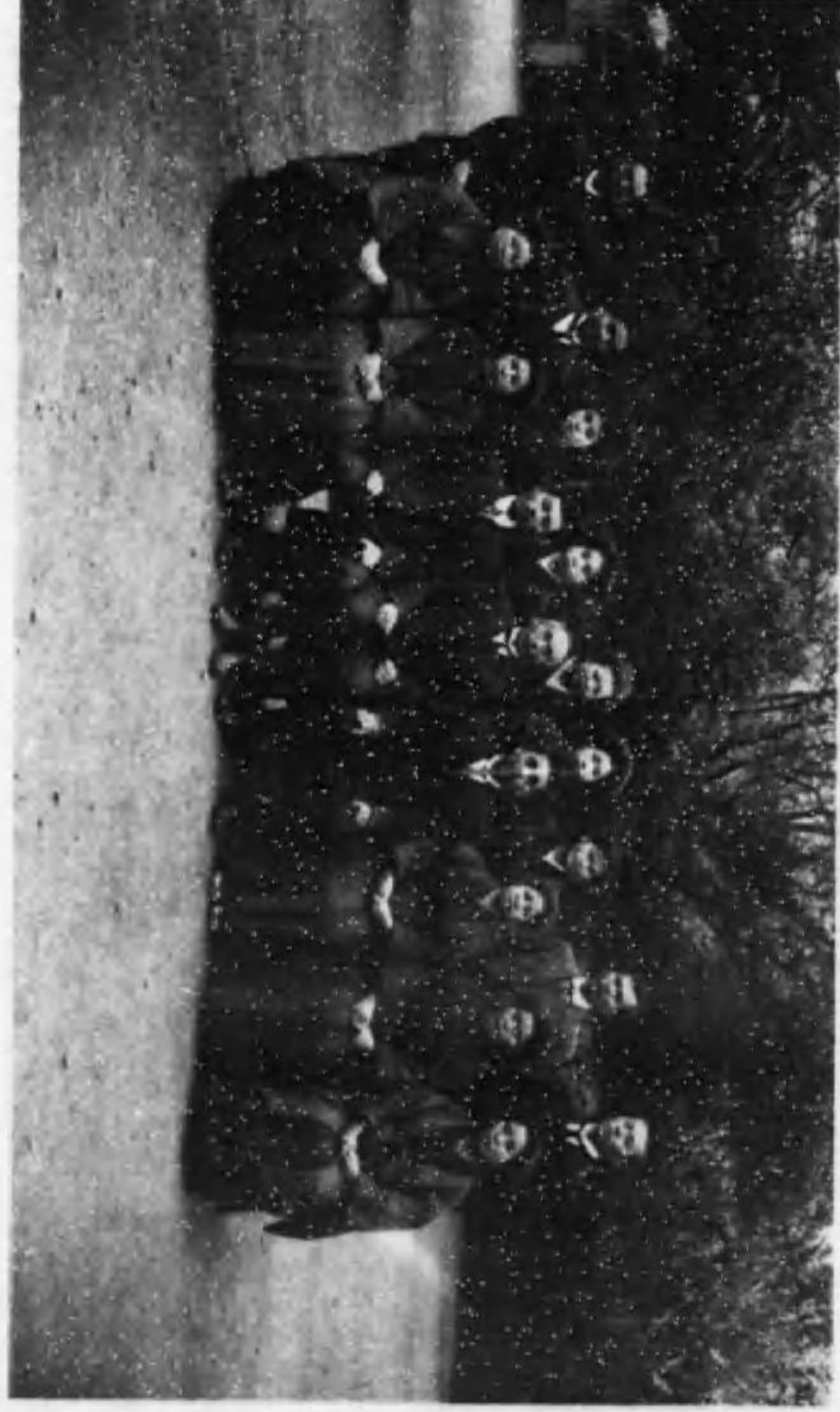
(イロハ順)

勝高山等小學校



勝高山等小學校職員





西山女兒高等小學校職員

西山女兒高等小學校



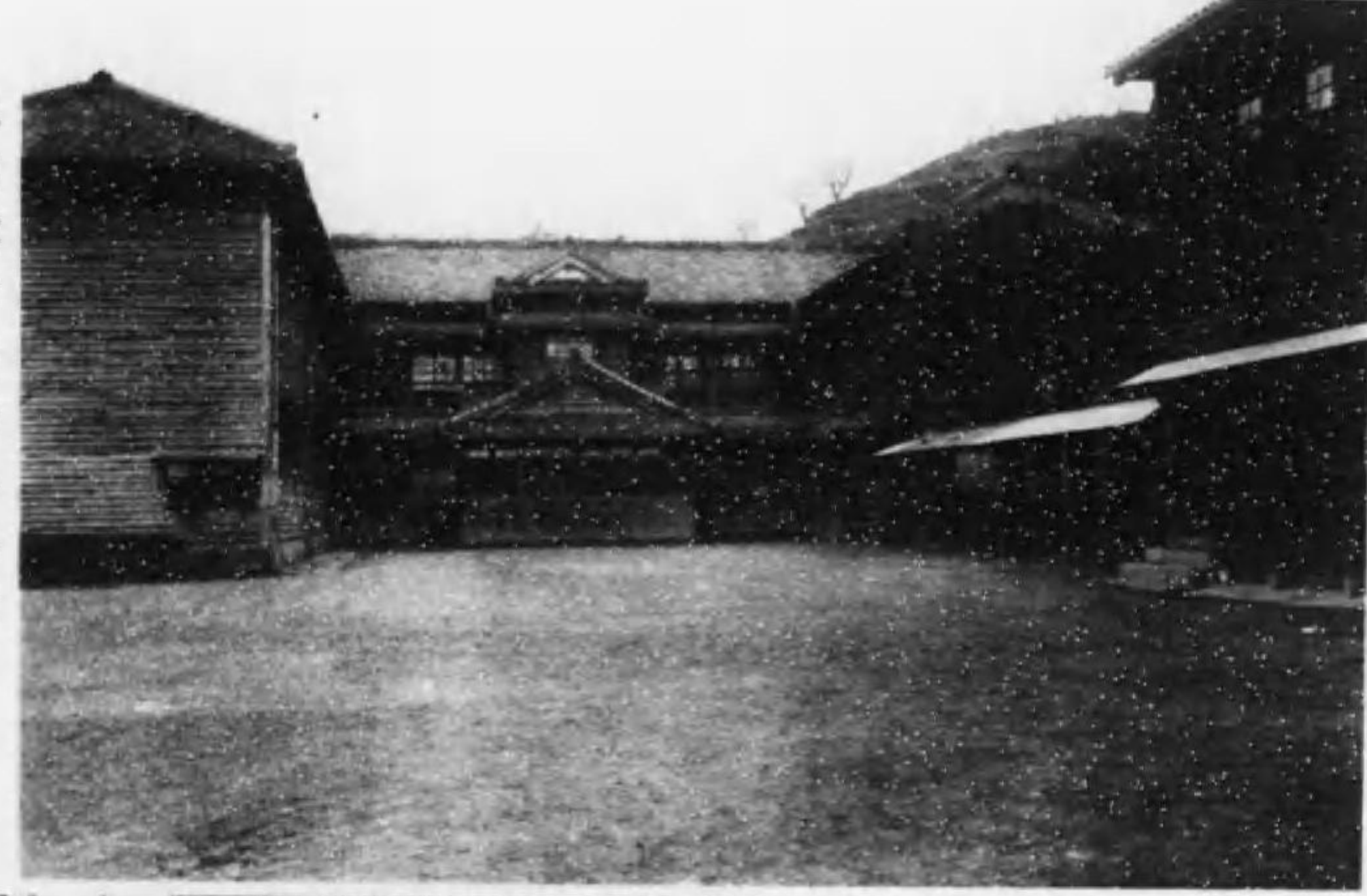
勝山高等小學校 (大正十一年二月一日現在)

- 一、創立 明治六年三月十一日
- 一、現在ノ校名ニ變
更セシ年月日 明治三十四年三月十一日
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治二十三年十月三日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正四年十月廿六日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正五年十月二十三日
- 一、勅語謄本下付 明治二十四年二月十三日
- 一、戊申詔書下付 明治四十一年十一月二日
- 一、校地 一〇三〇坪 運動場 五五〇坪 教室數 (普通) 一四
(特別) 一
- 一、學級數 一四 兒童數 男七九五
- 一、職員 男二〇

勝山高等小學校職員 (大正十一年二月末調)

訓導委員長	北野孝治
訓導	北尾松茂 (時影不在)
同	藤崎茂衛
同	高木光彦
同	小野田増市
同	森新太郎
同	菅真田潔男
同	相川頼男
同	小佐々真衛
同	樋口大助
同	湯川伊一
同	佐護豊三郎
同	大野迪治
同	藤原謙治
同	後藤子達 (時影不在)
同	吉田保民
同	近藤武真男
同	古曾根名嘉次郎
代用教員	吉田彌兵衛
同	井上唐三

仁田尋常高等小學校



仁田尋常高等小學校職員

西山女兒高等小學校 (大正十二年二月一日現在)

- 一、創立 明治九年三月十一日
- 一、現在ノ校名ニ變更セシ年月日 明治三十五年十月三日
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治廿三年十月三日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正四年十月二十六日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正五年五月二十二日
- 一、勅語謄本下付 明治廿四年二月十三日
- 一、戊申詔書下付 明治四十一年十一月二日
- 一、校地 一三五七坪 運動場 九八八坪 教室數 (普通) 二二 (特別) 二
- 一、學級計數 一二 兒童數 女六九六
- 一、職員 (男) 一七 (女) 一〇七

西山女兒高等小學校職員 (大正十二年二月末課)

訓導長	宇	土	藤	作
訓導	山	本	善	次
同	金	子	輝	夫
同	四	島	寛	藏
同	上	野	政	大
同	上	杉		茂
同	佐	藤	ユ	ク
同	長	川	政	常
同	向	井	マ	ユ
同	小	城	ミ	ホ
同	成	石	ク	ニ
同	賀	來	テ	イ
同	井	村	ヒ	ロ
同	松	尾		善
同	高	木	ミ	エ
同	小	森	チ	エ
代用教員	馬	越	久	代
同	江	口	シ	ン
同	川	田	次	郎

仁田尋常高等小學校 (大正十一年二月一日現在)

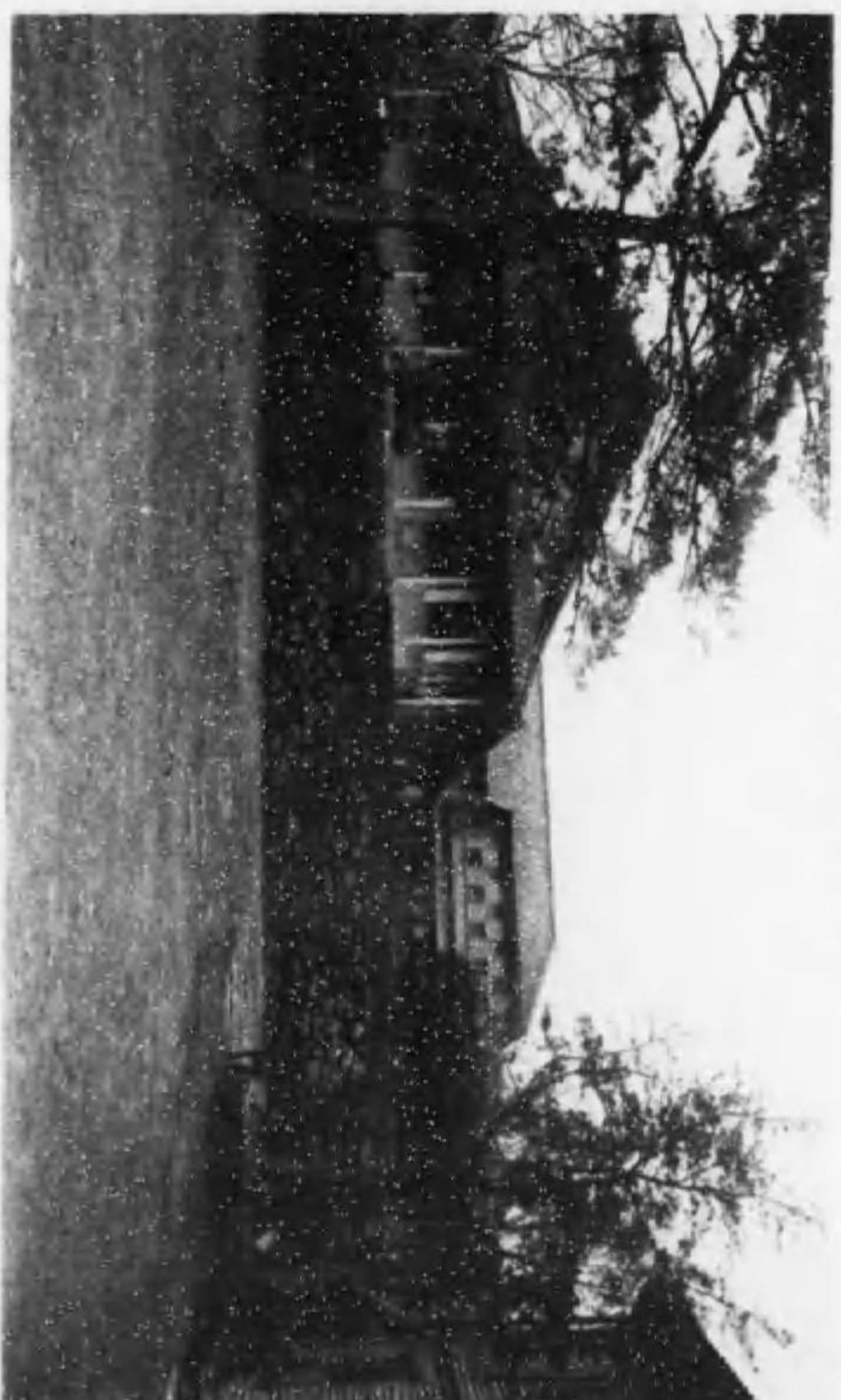
- 一、創立 明治三十五年二月一日
- 一、現在ノ校名ニ變 大正十年四月廿五日
更セシ年月日
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治三十五年十二月二十五日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、勅語膠本下付 明治三十五年五月十日
- 一、戊申詔書下付 明治四十一年十一月二日
- 一、校地 一八八〇坪 運動場 八〇〇坪 教室數(普通一八
二、學級數(尋常一九 兒童數(男五四八 高等(男五三〇
女四九七 女)三〇
- 一、職員(男九
女九

仁田尋常小學校職員 (大正十一年二月末調)

訓導長	松本	部
訓導	岩永	武文
同	野口	兵馬
同	吉川	滿朝
同	萩原	塚磨
同	松尾	繁人
同	高橋	清人
同	宮田	エキ
同	月川	彌右衛門
同	森川	花門
同	野原	枝花
同	町田	ノ枝
同	山口	ノ平
准訓導	田原	ハコ
代用教員	大町	レツ
同	中村	ケイ
同	松尾	フケ
同	小西	ヒロシ

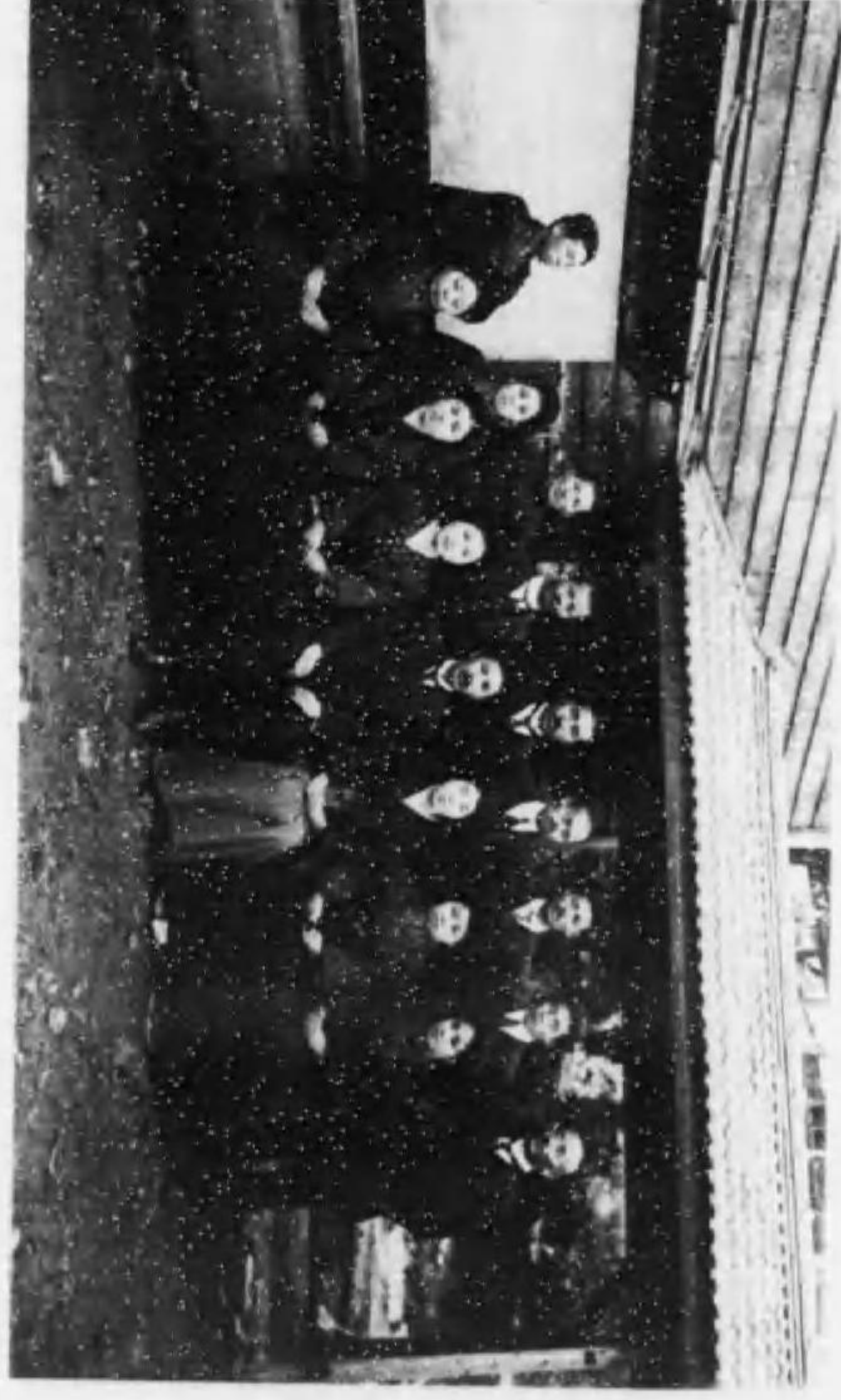
イ(撮影時不在)
キ(撮影時不在)

校學小等高常尋古佐



員職校學小等高常尋古佐





南大浦尋常高等小學校職員

南大浦尋常高等小學校



佐古尋常高等小學校 (大正十二年二月一日現在)

- 一、創立 明治三十九年六月一日
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治四十年三月廿日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正四年十月廿六日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正五年十月二十三日
- 一、勅語謄本下付 明治四十年一月廿九日
- 一、戊申詔書下付 明治四十二年十一月二日
- 一、校地 一五七二坪餘 運動場四七一坪餘 教室數(普通)二〇
(特別)一
- 一、學級數(尋常)三〇 兒童數(男)五六〇 高等(男)一七〇
(高等)三 女(女)六五一 高等(女)二七〇
- 一、職員(男)一〇
(女)一〇

佐古尋常高等小學校職員 (大正十二年二月末調)

訓導長	市川庄次郎
訓導	山中敬夫
同	松室元治郎
同	松谷源治郎
同	北崎精太郎
同	川口三之助
同	松岡定次郎
同	辻橋壽
同	藤川市太郎
同	田尻千代
同	高取千代
同	林田ト
同	山本イヌ
同	上田シヅ
同	香月ユキ
同	釜崎イソ
同	三根イノ
同	宮田チヅ
同	香月シヅ
代用教員	山元藤助
同	小串ユキ

(時續不在)

朝日尋常高等小學校



朝日尋常高等小學校職員

南大浦尋常高等小學校 (大正十二年二月一日現在)

- 一、創立 明治三十六年四月十三日
- 一、現在ノ校名ニ變 大正十年四月九日
- 一、更セシ年月日
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治三十八年十二月三十一日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正六年十月廿日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正六年十月廿日
- 一、勅語謄本下付 明治三十七年八月二十二日
- 一、戊申詔書下付 明治四十一年十一月二日
- 一、校地 二八〇〇坪 運動場 二〇〇〇坪 教室數 (普通) 二〇〇 (特別) 〇〇
- 一、學級數 (尋常) 一七 兒童數 (男) 五〇七 (女) 四七七 高等 (男) 一六六 (女) 〇
- 一、職員 (男) 二二 (女) 七

南大浦尋常小學校職員 (大正十二年二月末調)

訓導長	村	里	光
訓導	永	田	貞美
同	松	田	實男
同	森		莊 (時不在)
同	山	内	敬全 (全不在)
同	有	吉	傳作
同	中	村	照
同	長	淵	榮太郎
同	福	島	孝十
同	津	島	壽
同	田	尻	善
同	安	村	方ノ
同	吉	松	祐一
同	平	田	道子
准訓導	石	塚	智男
同	山	下	力
代用教員	川	田	治 (時不在)
同	水	田	ア
同	村	上	ア

朝日尋常高等小學校 (大正十一年二月一日現在)

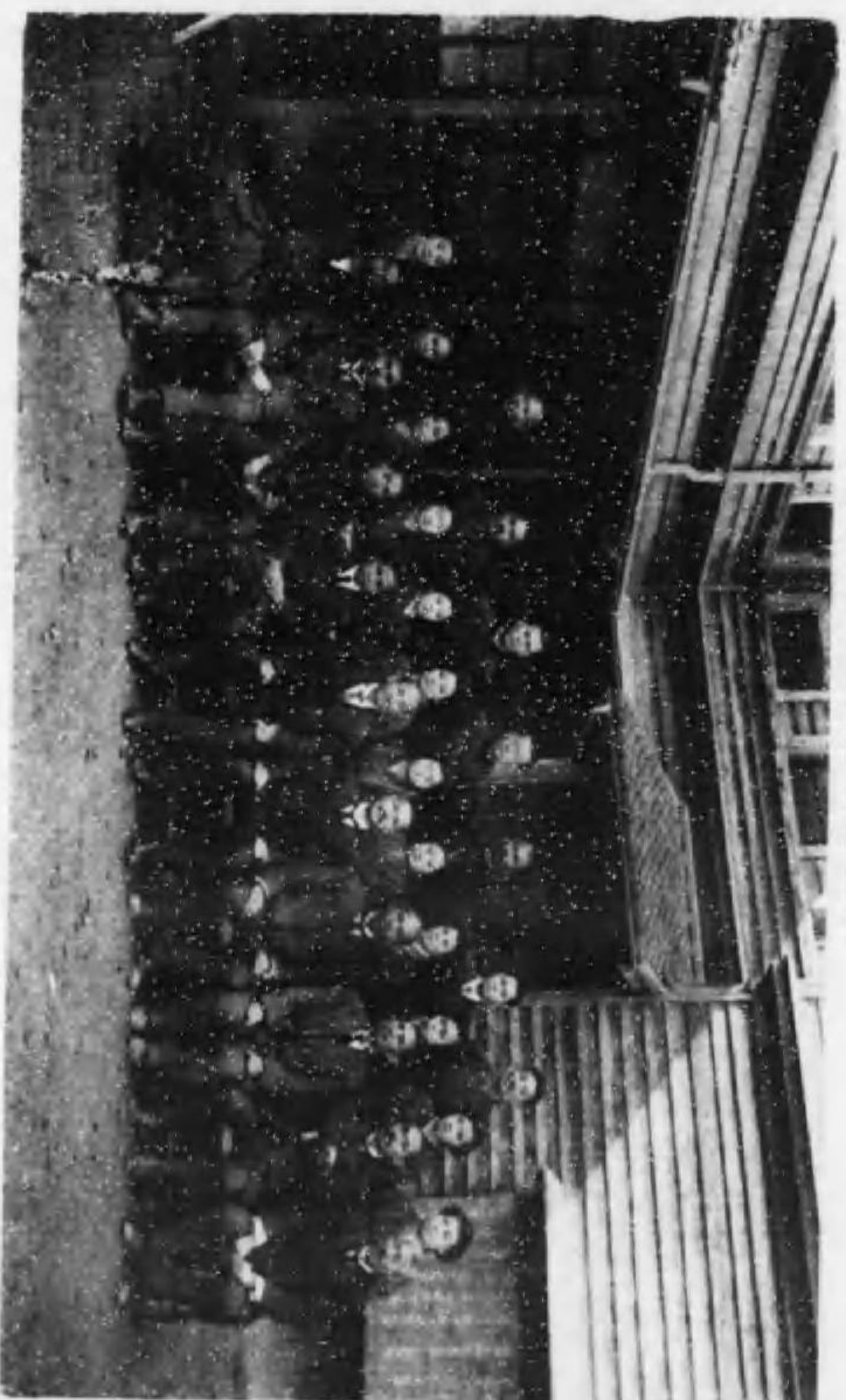
- 一、創立 大正六年十月二日
- 一、現在ノ校名ニ變更セシ年月日 大正十年四月二十五日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正八年十二月二十七日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正八年十二月二十七日
- 一、勅語謄本下付 大正八年十一月二十七日
- 一、校地 一九二二坪 運動場 一二三〇坪 教室數(普通一九
特別一)
- 一、學級數(尋常二〇 兒童數(男六六五 高等(男八八
女五四六 女六〇
- 一、職員(男二二 女九

朝日尋常高等小學校職員 (大正十一年二月末調)

訓導	松尾善四郎
同	武藤誠次
同	村上邦次
同	松尾逸次
同	白濱常
同	宮崎崎
同	入川崎
同	田川崎
同	久米崎
同	松本崎
同	竹内崎
同	川原崎
同	今村崎
同	吉川崎
同	大田崎
同	芥川崎
同	林崎
同	二宮崎
同	秀島崎
同	蓋崎
同	橋崎
代用教員	美子(撮影時不在)

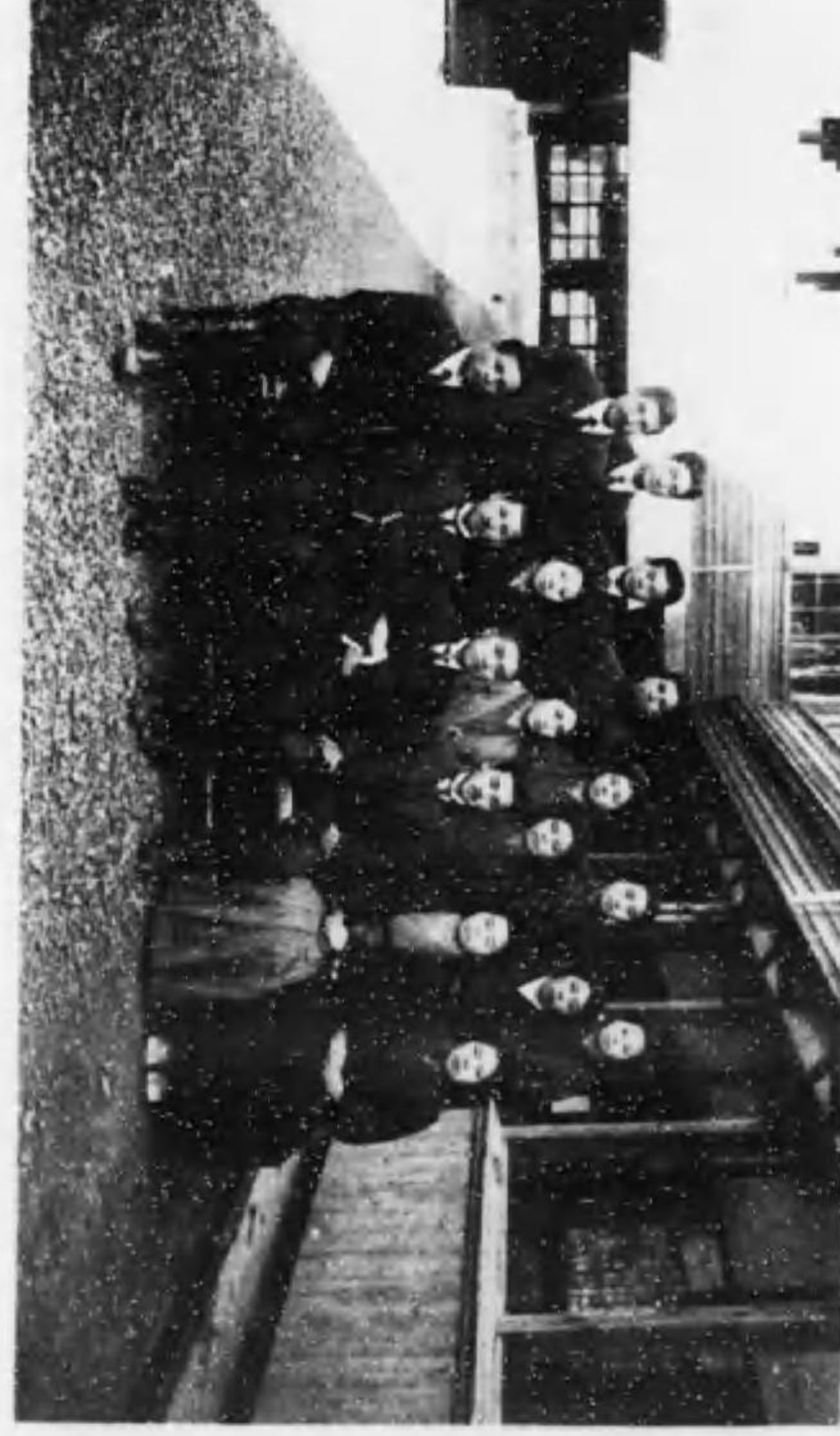


朝日尋常高等小學校



朝日尋常高等小學校職員

上長崎尋常高等小學校職員



上長崎尋常高等小學校



- 一、職員(男)二八 (女)二三
- 一、學級數(尋常)三二 兒童數(男)七〇九 (女)六四四 高等(男)二二九 (女)一四三
- 一、校地二〇四五坪 運動場一〇八九坪 教室數(普通)二五 (特別)二
- 一、戊申詔書下付 明治四十二年十一月二日
- 一、勅語謄本下付 明治三十五年七月十四日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正五年五月廿三日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正四年十月廿六日
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治三十六年十一月十一日
- 一、更セシ年月日 明治四十一年四月六日
- 一、創立 明治十五年十二月七日

稻佐尋常高等小學校 (大正十一年三月一日現在)

代用教員		稲佐尋常高等小學校職員 (大正十一年三月末調)	
山鏡中	大織	訓導長	林 小
崎邊野	村園	司	丸 田
トモ	友源	司	皆 代
ク	一	司	前 野
		司	川 信
		司	谷 新
		司	川 太
		司	本 碩
		司	木 嶺
		司	新 利
		司	新 太
		司	大 助
		司	三 七
		司	三 三
		司	市 郎

山里尋常高等小學校



山里尋常高等小學校職員

上長崎尋常高等小學校 (大正十二年二月一日現在)

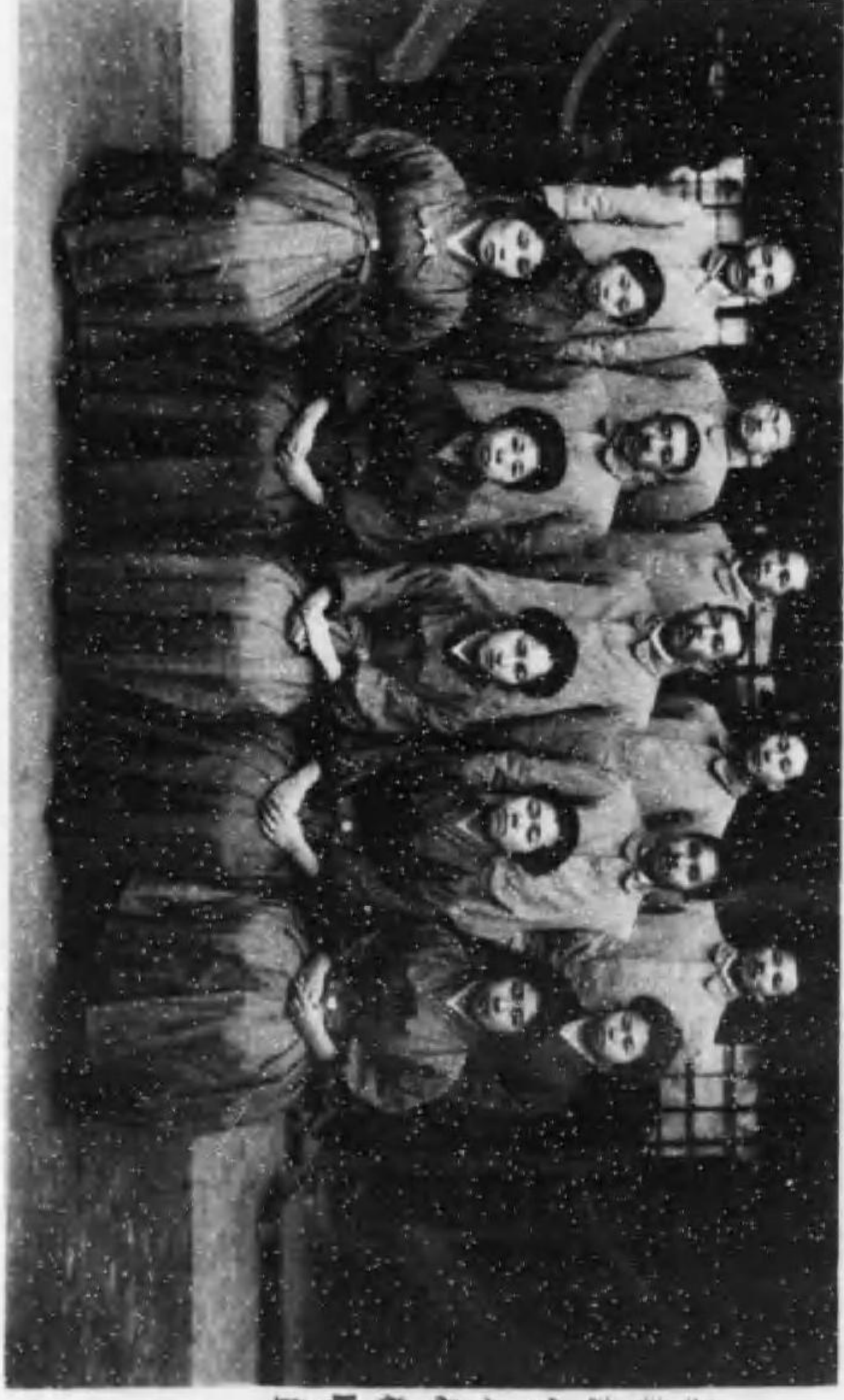
- 一、創立 明治九年十月十三日
- 一、現在ノ校名ニ變 明治三十四年四月
更セシ年月日
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治廿六年十一月三日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正四年十月廿九日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正五年十月廿三日
- 一、勅語謄本下付 明治二十六年十一月三日
- 一、校地 七二〇坪 運動場 三四二坪 教室數(普通) 二八
(特別)
- 一、學級數(尋常) 二八 兒童數(男) 四九一 高等(男) 七二
(女) 五二八 (女) 四三
- 一、職員(男) 一〇 (女) 九

上長崎尋常高等小學校職員 (大正十二年二月末現在)

訓導長	藤	岩	巳	之	一
訓導	松	本	久	一	一
同	大	塚	正	一	一
同	河	野	駒	一	一
同	境	吉	郎	一	一
同	本	田	元	一	一
同	玉	井	ツ	一	一
同	前	田	清	一	一
同	長	島	盛	一	一
同	寺	井	榮	一	一
同	黒	河	内	一	一
同	戸	島	マ	一	一
同	小	須	賀	一	一
同	入	江	シ	一	一
同	黒	田	ス	一	一
同	徳	口	モ	一	一
同	松	岡	信	一	一
同	小	森	チ	一	一
同	村	友	太	一	一

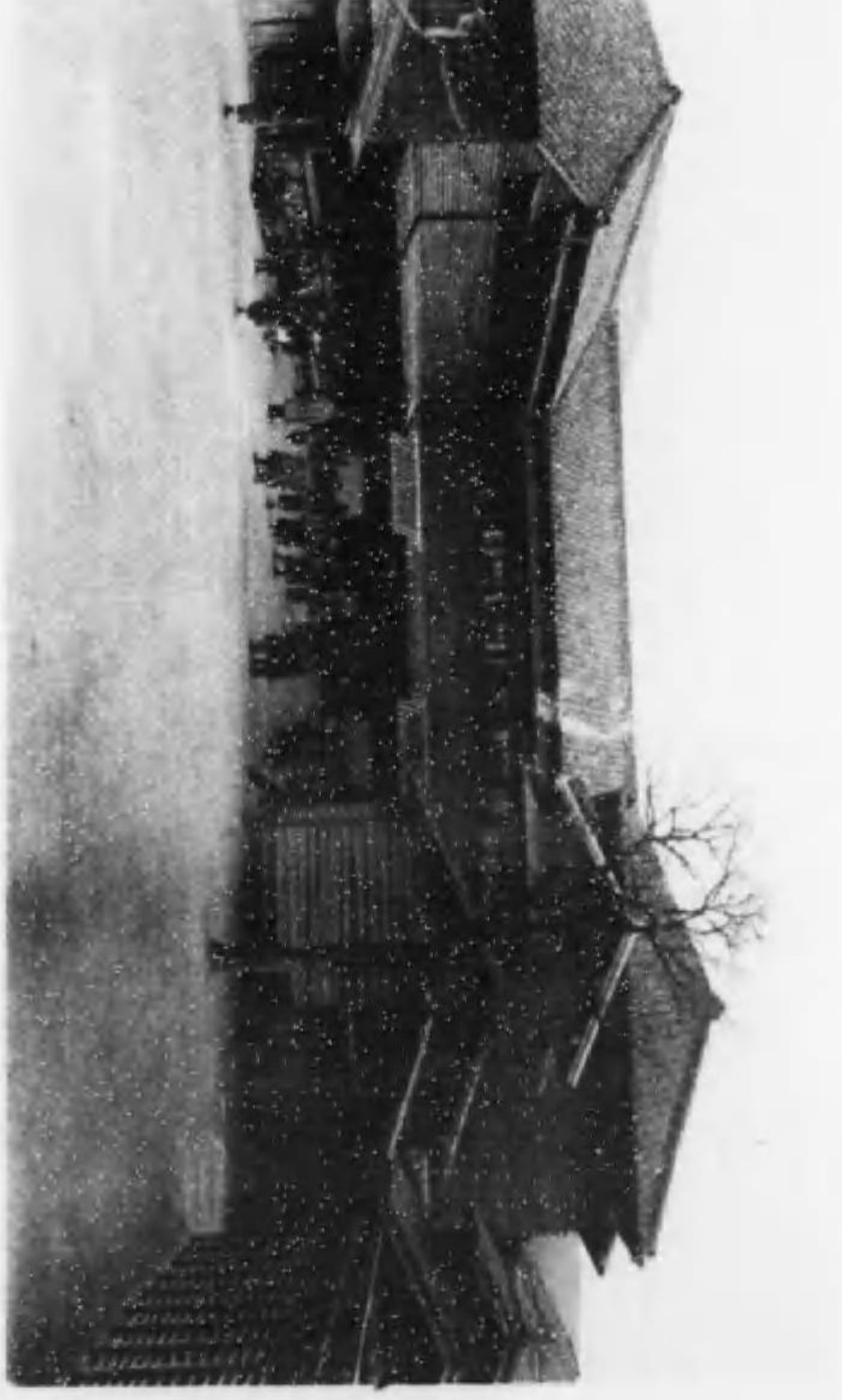
(時攝不影在)

(時攝不影在)



興善尋常小學校職員

興善尋常小學校



勝山尋常小學校 (大正十二年三月一日現在)

- 一、創立 明治六年三月十一日
- 一、現在ノ校名ニ變
更セシ年月日 明治三十四年三月十日
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治二十六年五月十九日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、勅語謄本下付 明治二十四年二月十三日
- 一、戊申詔書下付 明治四十二年十二月二日
- 一、校地 一〇七八坪 運動場 七二六坪 教室數(普通)二〇
(特別)一
- 一、學級數 二四 兒童數(男)七二四
(女)六三五
- 一、職員(男)一一
(女)一〇

勝山尋常小學校職員 (大正十二年二月末調)

訓導長	方	佐
訓導	重野	忠治
同	田中	元作
同	本田	健十
同	白石	茂市
同	上近	六夫
同	浦季	夫
同	大渡	林之助
同	赤木	真三
同	中山	廿
同	本多	義
同	江頭	正
同	若杉	エ
同	松室	マ
同	松尾	子
同	手島	元
同	安元	不在
同	金子	マ
同	松尾	エ
同	江頭	マ
代用教員	赤井	ミ

新町尋常小學校



新町尋常小學校職員

興善尋常小學校 (大正十一年二月一日現在)

- 一、創立 明治七年十二月廿日
- 一、現在ノ校名ニ變
更セシ年月日 明治四十一年四月八日
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治三十五年十二月二十三日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正四年十月三十日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、勅語謄本下付 明治三十五年十一月三日
- 一、戊申詔書下付 明治四十一年十月廿七日
- 一、校地 七六三坪 運動場 三四六坪
- 一、學級數 一七 兒童數(男四一八
女三八三)
- 一、職員(男 八
女 八)

教室數(普通一四
特別一〇)

興善尋常小學校職員 (大正十一年二月末調)

訓導長	中	村	義	雄
訓導	松	園	誠	誠
同	渡	邊	明	綱
同	近	藤	勝	己
同	武	次	繁	松
同	里	中	秀	豐
同	田	中		實
同	松	田	シ	ツ
同	村	山	ひ	で
同	吉	原	フ	ミ
同	成	石	ハ	ナ
同	小	山	器	ナ
同	諸	藤	喜	和
同	丹	羽	ト	ミ
代用教員	給	木	ミ	ナ
同	坂	上	豊	美
				子

時不在

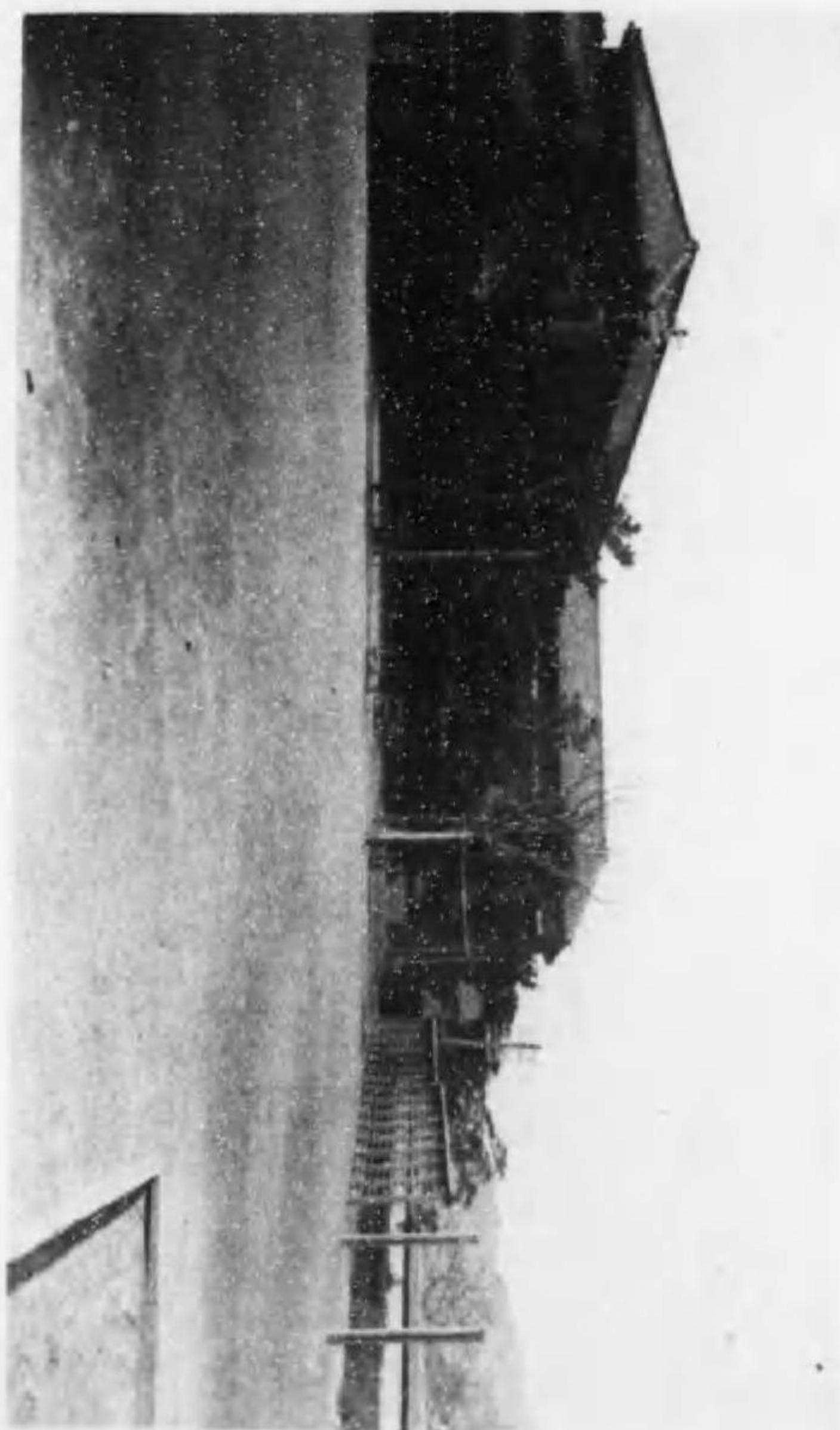
新町尋常小學校 (大正十一年二月一日現在)

- 一、創立 明治三十五年四月一日
- 一、現在ノ校名ニ變 明治四十一年四月六日
更セシ年月日
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治三十七年十月廿二日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、勅語謄本下付 明治三十七年八月廿二日
- 一、戊申詔書下付 明治四十一年十一月二日
- 一、校地 六五六坪 運動場(屋外)二九五坪
屋内 五〇坪 教室數(普通)二〇
(特別)〇
- 一、學級數 一二 兒童數(男)四〇九
(女)四〇三
- 一、職員(男)七
(女)六

新町尋常小學校職員 (大正十一年二月末調)

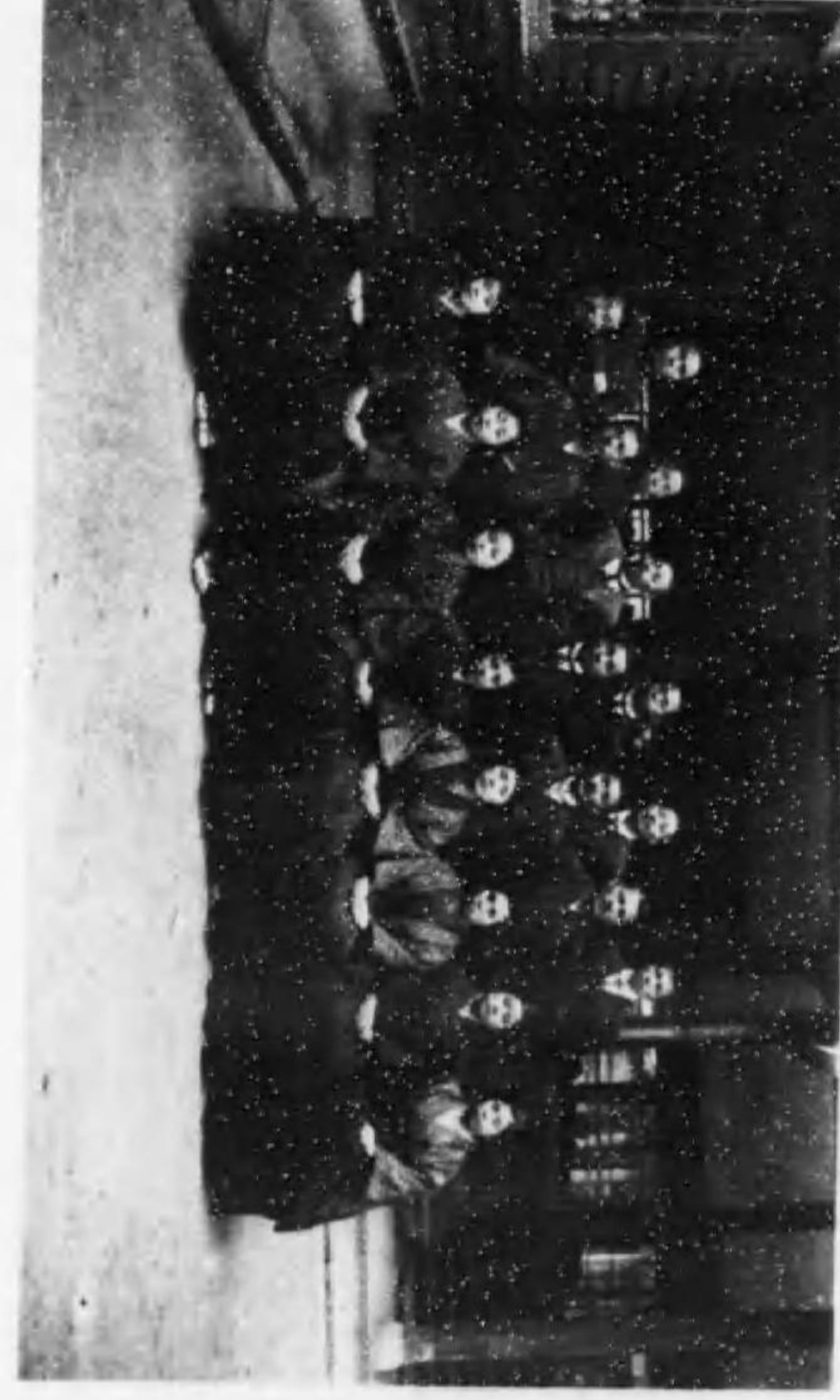
訓導校長	村田直輝
訓導	龜田管根
同	中山明治
同	森川松一
同	內野エ
同	高木
同	村山マ
同	今村千代
同	寺井貞
同	前田
同	山崎
同	西山
同	代用教員
同	林田

校學小常尋林良伊



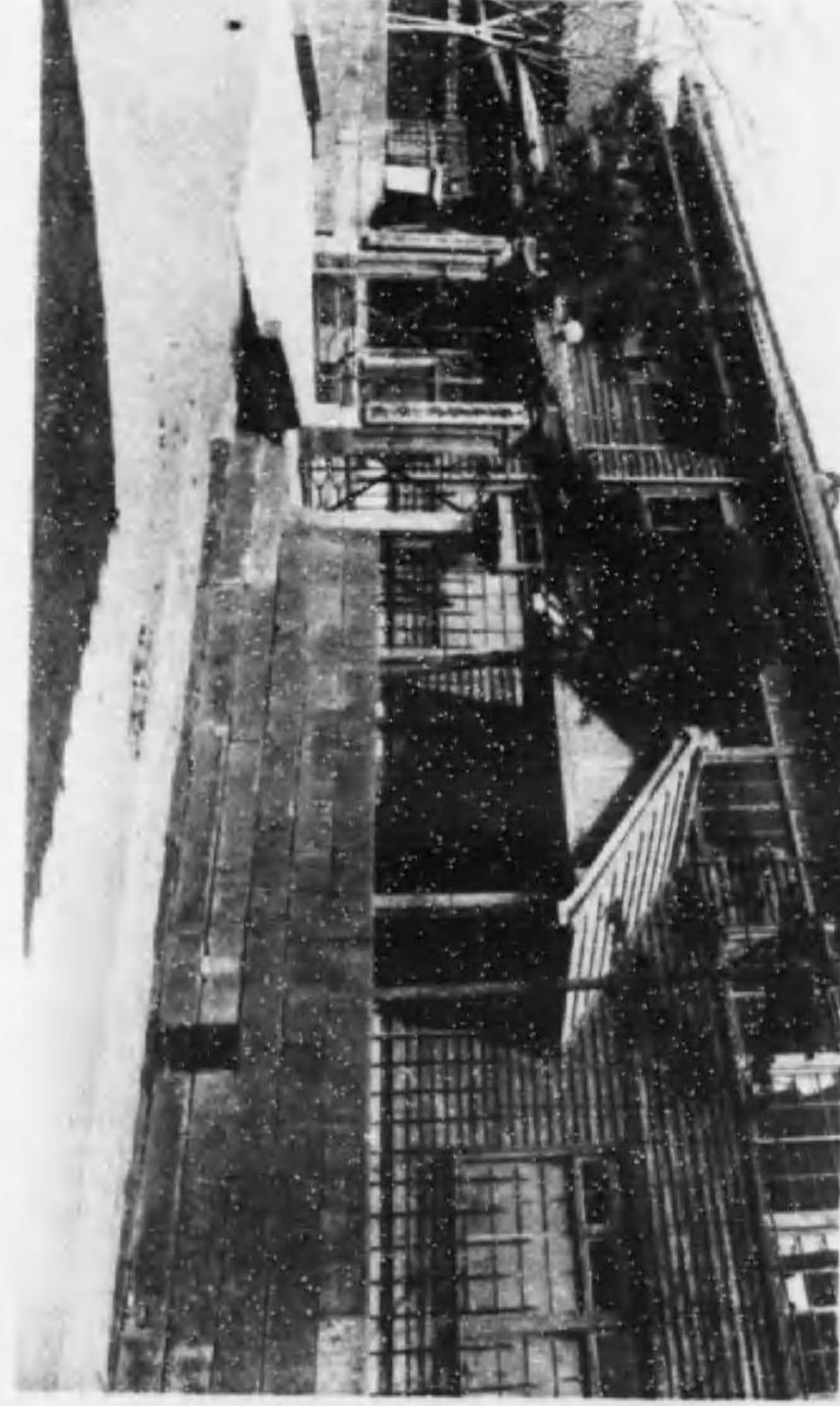
員職校學小常尋林良伊





伊賀林尋常小學校職員

伊賀林尋常小學校



伊賀林尋常小學校 (大正十二年二月一日現在)

- 一、創立 明治三十五年十月一日
- 一、現在ノ校名ニ變
更セシ年月日 明治四十一年四月
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治三十五年九月五日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、勅語謄本下付 明治三十五年九月五日
- 一、戊申詔書下付 明治四十一年十一月二日
- 一、校地 一二六四坪 運動場 七〇〇坪 教室數(普通)一四
(特別)〇
- 一、學級數 一七 兒童數(男)五〇四
(女)五二一
- 一、職員(男)七八

伊賀林尋常小學校職員 (大正十二年二月末迄)

訓導委員長	松	尾	爲	水	郎
調 導	木	島	榮	作	
同	渡	邊	榮	作	
同	小	川	菊	松	
同	西	川	乙	市	
同	喜	多	茂	市	
同	黒	田	喜	藤	
同	小	川	ハ	シ	
同	藤	山		邊	
同	横	田	稻	大	
同	下	村	理	意	
同	岡	田	キ	ク	
同	齊	藤	ク	マ	
同	岩	崎	テ	シ	
代用教員	河	野	ス	マ	

小島尋常小學校



小島尋常小學校職員

磨屋尋常小學校 (大正十一年三月二日現在)

- 一、創立 明治六年三月十一日
- 一、現在ノ校名ニ變
更セシ年月日 明治四十一年四月二日
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治二十六年五月十九日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、勅語謄本下付 明治二十四年二月十三日
- 一、戊申詔書下付 明治四十一年十一月二日
- 一、校地 一二三坪餘 運動場六八四坪餘
- 一、學級數 二四 兒童數 (男六五三
女六三六)
- 一、職員 (男一一〇
女一一〇)

教室數(普通)二〇
(特別)一

磨屋尋常小學校職員 (大正十一年三月末現在)

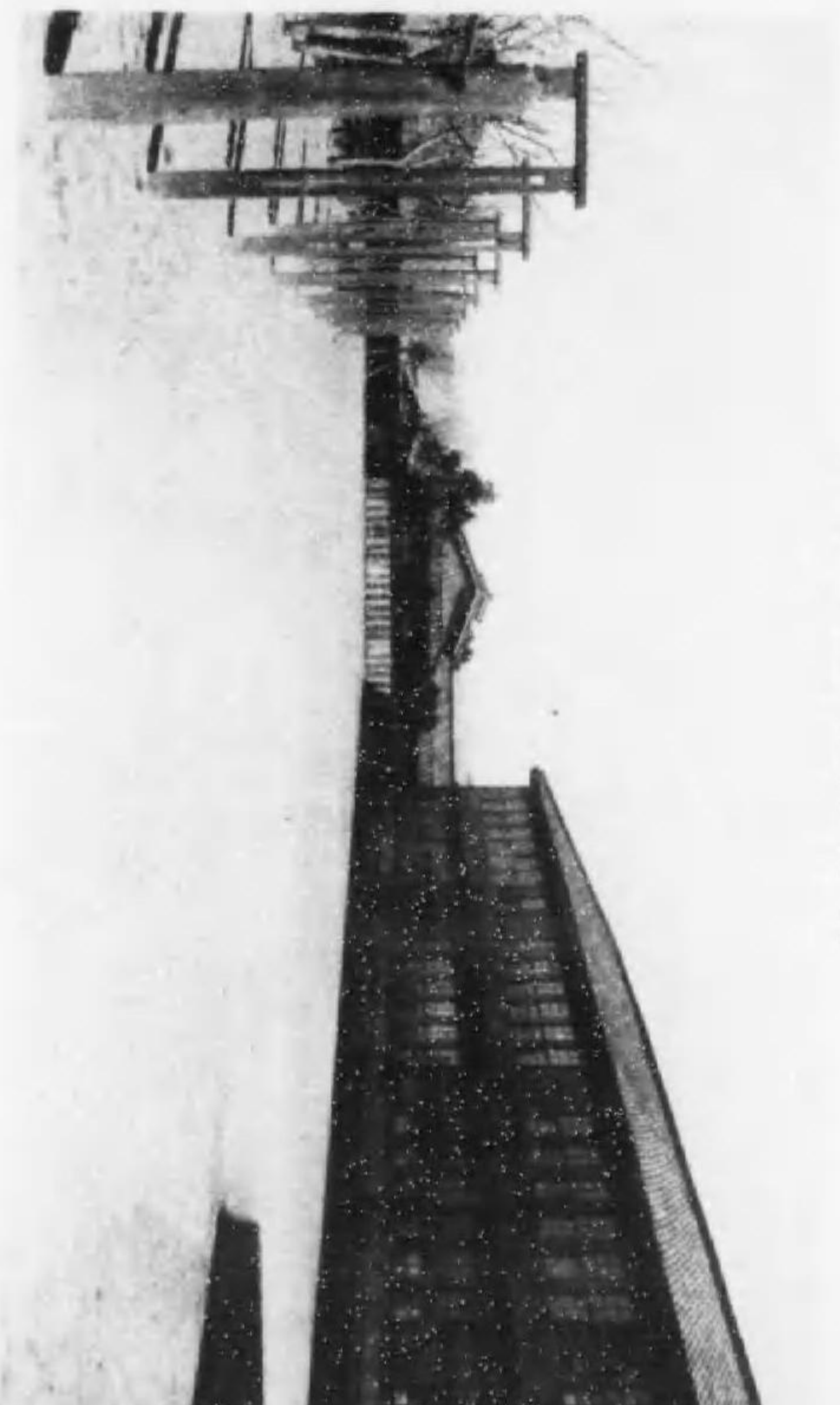
訓導兼校長	山	内	久	大	郎
訓導	立	石	盛	祐	
同	山	田	島	大	郎
同	武	藤	生	駒	
同	船	越	義	治	
同	松	尾	新	三	郎
同	大	河	内	忍	
同	大	淵	眞	澄	
同	後	藤	エ	イ	(時攝不在)
同	徳	水	マ	サ	エ
同	相	田	助	次	
同	山	口	國	右衛門	
同	小	川		明	
同	宮	水	ム	イ	
同	二	瓶	ミ	サ	イ
同	矢	野	ズ	ヘ	(時攝不在)
同	東		ヒ	ヂ	
同	藤	崎	コ	ト	
同	大	久	保	サ	イ
代用教員	小	川	ミ	ツ	エ
	北	川	エ	イ	コ

小島尋常小學校 (大正十一年二月一日現在)

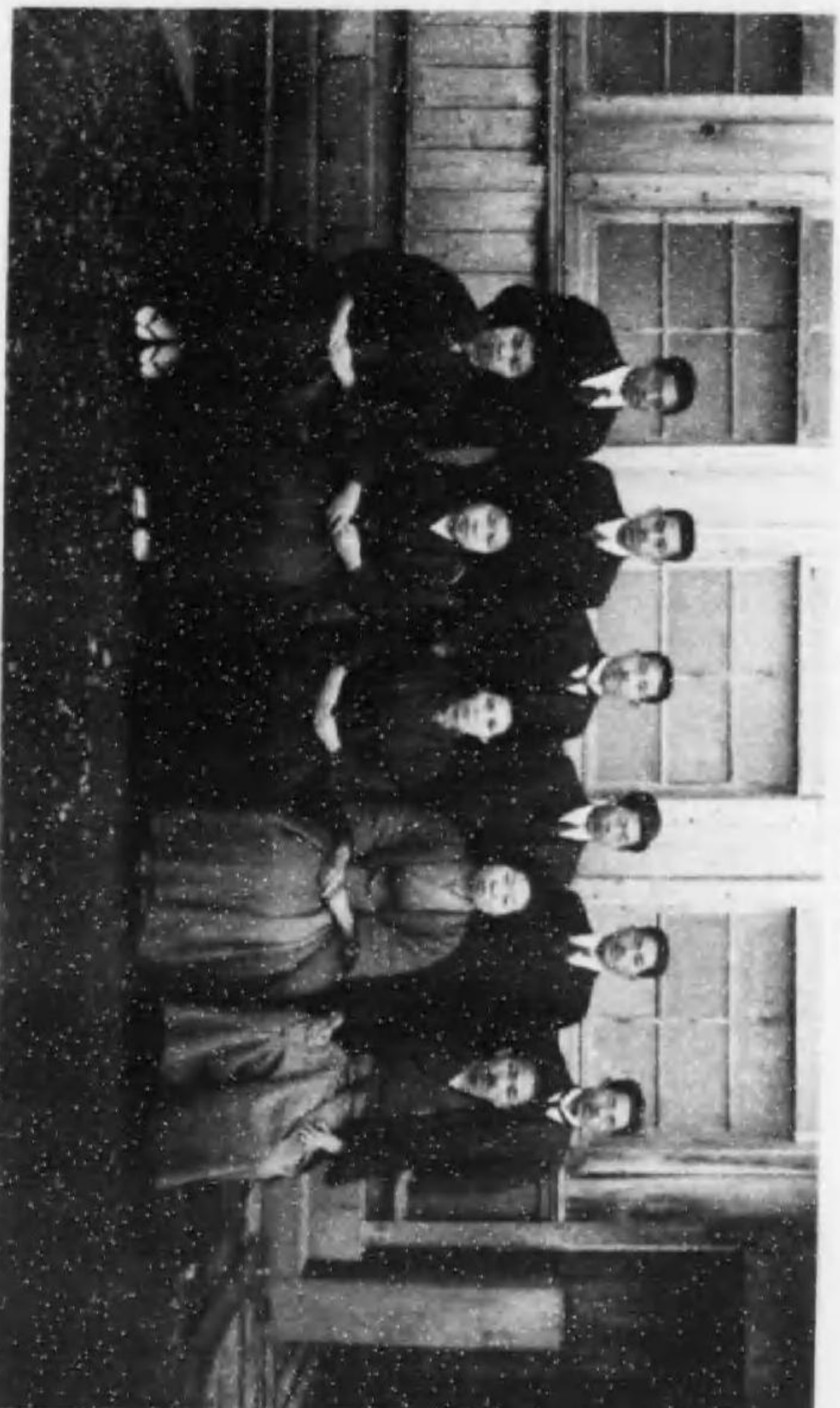
- 一、創立 明治十九年一月十四日
- 一、現在ノ校名ニ變 明治二十五年八月十日
更セシ年月日
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治二十六年七月八日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、勅語謄本下付 明治二十四年二月十六日
- 一、戊申詔書下付 明治四十一年十一月二日
- 一、校地 一〇〇二坪餘 運動場 七〇一坪 教室數(普通)一三
特別一〇
- 一、學級數 一六 兒童數(男)四四三
(女)四三五
- 一、職員(男)八 (女)六

小島尋常小學校職員 (大正十一年二月末調)

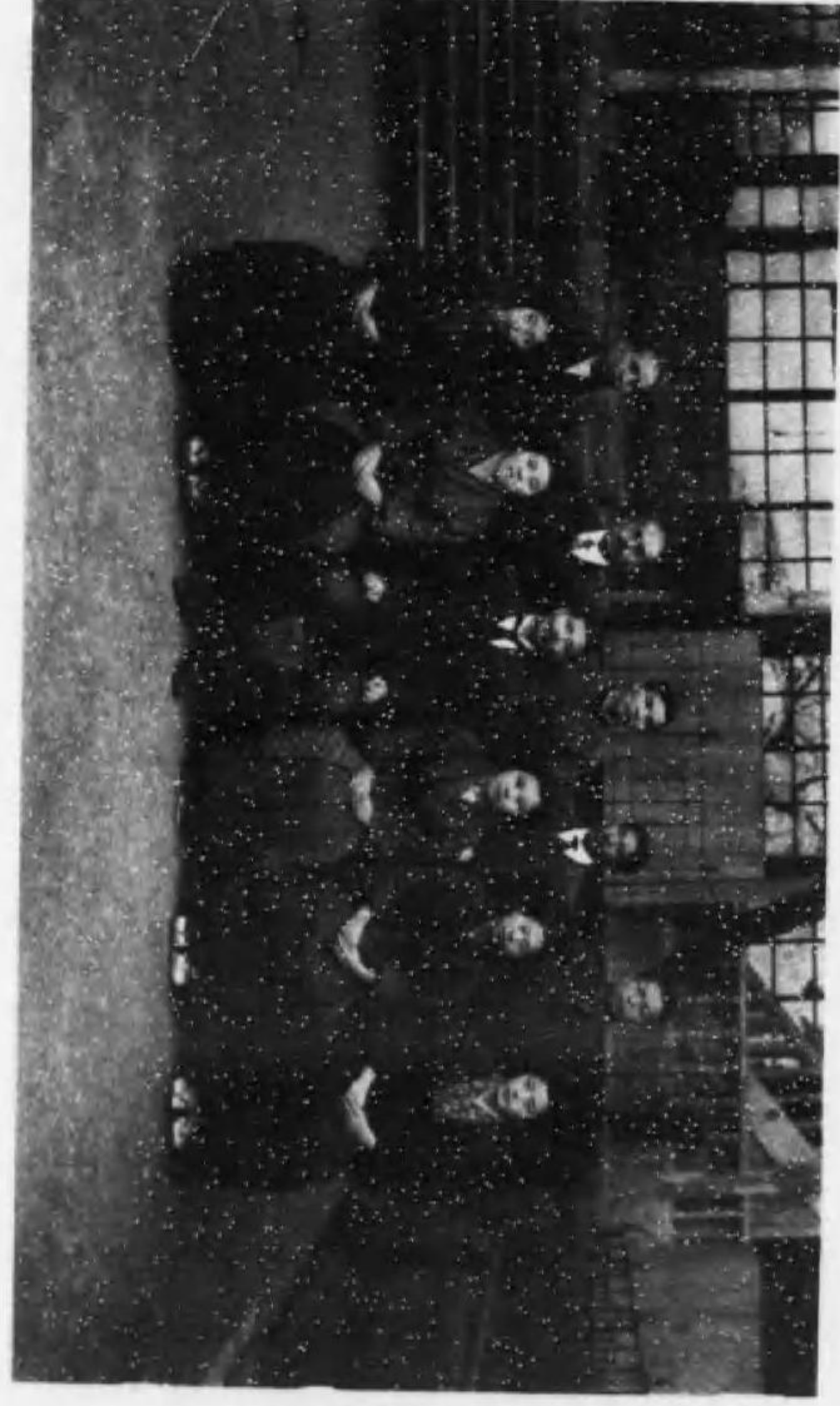
訓導學校長	小柳登喜彌
訓導	田中英二
同	宮田福市
同	井上千守
同	本庄繁
同	姫野フサ
同	榮井ミサ <small>(撮影常時不在)</small>
同	谷口マサシ
同	檀野コシ
同	岡村達太郎
同	杉野太郎
代用教員	月川新太郎
同	江頭初太郎
同	矢野壽美



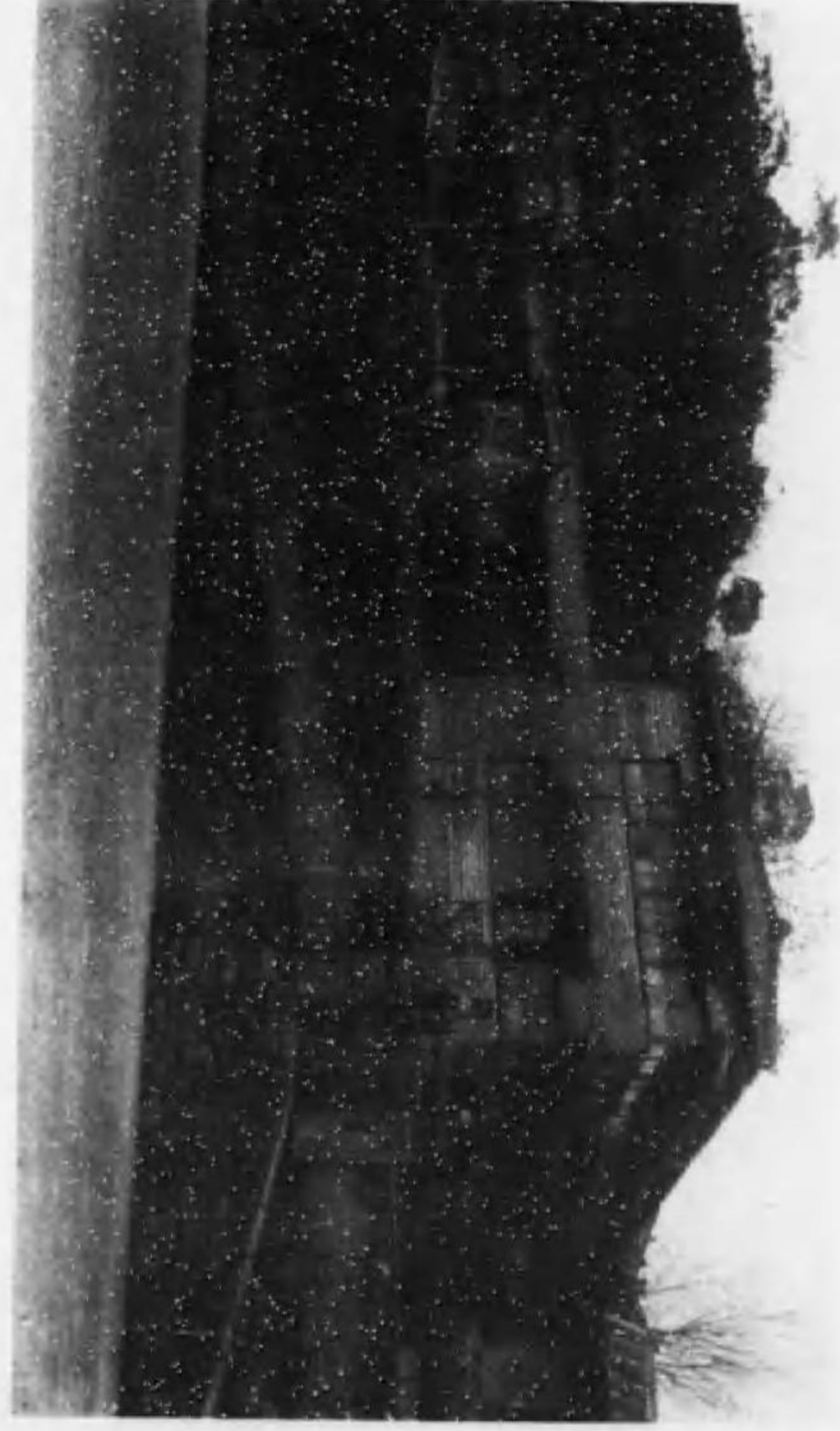
校學小常尋浦大上



員職校學小常尋浦大上



北大浦尋常小學校職員



北大浦尋常小學校

北大浦尋常小學校 (大正十二年二月二日現在)

- 一、創立 明治四十二年十月二十五日
- 一、現在ノ校名ニ變
更セシ年月日 明治四十五年四月一日
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治四十二年十月三十日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、勅語謄本下付 明治四十二年十月三十日
- 一、戊申詔書下付 明治四十二年十月三十日
- 一、校地 九九二坪 運動場 三〇〇坪 教室數(普通) 一〇〇
(特別) 〇〇
- 一、學級數 二二 兒童數(男) 三六三
(女) 三三六
- 一、職員(男) 四七
(女) 四七

北大浦尋常小學校職員 (大正十一年二月末調査)

訓導長	八	木	一	男
訓導	松	尾	末	吉
同	清	水	佐	生
同	藤	原	ハ	ッ
同	馬	場	寛	躬
同	江	島	智	夫
同	岩	口	イ	子
同	六	田	谷	次
同	岩	水	マ	ッ
同	小	山	サ	キ
代用教員	山	崎	芳	男

浪ノ平尋常小學校



浪ノ平尋常小學校職員

北大浦尋常小學校 (大正十二年二月一日現在)

- 一、創立 明治八年(月日不詳)
- 一、現在ノ校名ニ變
更セシ年月日 明治四十一年四月
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治廿六年五月二十日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、勅語謄本下付 明治二十四年二月十一日
- 一、戊申詔書下付 明治四十一年十一月二日
- 一、校地 八七三坪 運動場 二八五坪
- 一、學級數 一四 兒童數(男四三三
女四三六)
- 一、職員(男七
女五)

教室數(普通) 一〇
(特別) 一

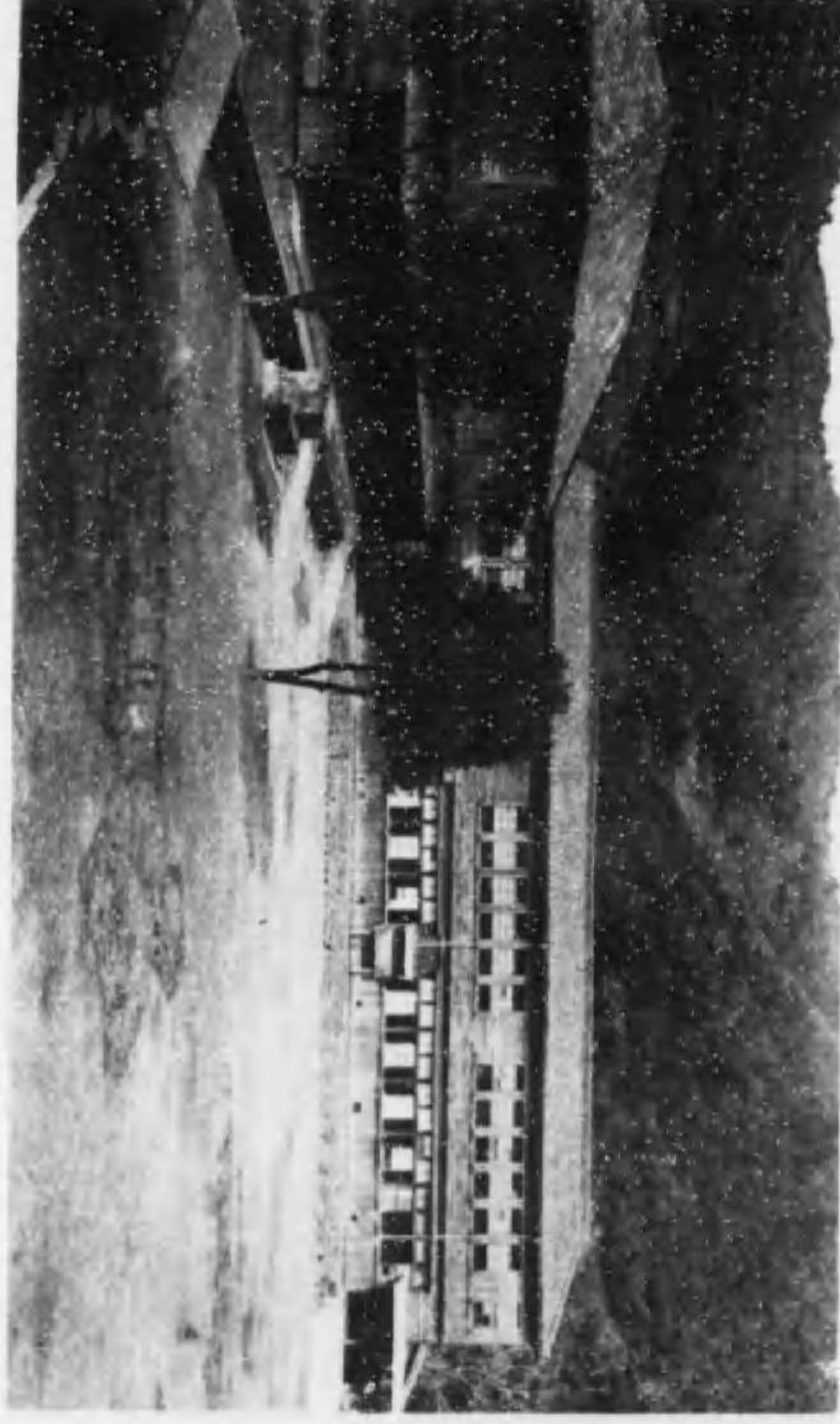
北大浦尋常小學校職員 (大正十二年三月末調)

訓導主任	下	岸	久	藏
訓導	大	湯	崎	一
同	中	村	隆	一 <small>(時攝不在)</small>
同	岡	田	芳	雄
同	鬼	塚	富	榮
同	森		ス	ミ
同	近	藤	ユ	キ
同	田	川	正	行
同	古	川	千	行
同	山	口	ト	キ
同	森	田	ミ	シ
代用教員	副	島	西	郎



立神尋常小學校職員

對帝中皇御影草



- 戸町尋常小學校 (大正十二年三月一日現在)
- 一、創立 明治十二年九月二十日
 - 一、現在ノ校名ニ變
更セシ年月日 明治二十三年(月日不詳)
 - 一、明治天皇皇后御影下賜 明治二十六年五月三十日
 - 一、天皇陛下御影下賜 大正六年十月二十日
 - 一、皇后陛下御影下賜 大正六年十月二十日
 - 一、勅語原本下付 明治二十四年二月十一日
 - 一、戊申詔書下付 明治四十二年十二月二日
 - 一、校地 九三〇坪 運動場 六六二坪 教室數(普通)七
(特別)〇
 - 一、學級數 九 兒童數(男)二八三
(女)四九九
 - 一、職員(男)二六
(女)二

戸町尋常小學校職員 (大正十二年三月一日現在)

訓導長	知島定太郎
訓導	塚木入太郎
同	岩崎金揚
同	龜山虎雄
同	富川壽
同	一ノ瀬チエノ
代用教員	松永清重
同	徳水マシ

他ノ浦尋常小學校



他ノ浦尋常小學校職員

立神尋常小學校 (大正十二年二月一日現在)

- 一、創立 明治四十一年四月六日
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治四十二年十月三十日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、勅語謄本下付 明治四十三年十月三十日
- 一、戊申詔書付下 明治四十一年十二月二日
- 一、校地 一一五二坪 運動場 五九〇坪 教室數 (普通) 一〇〇 (特別) 〇〇
- 一、學級數 一一 兒童數 (男) 三五八 (女) 二五八
- 一、職員 (男) 六 (女) 五

立神尋常小學校職員 (大正十二年二月末調)

訓導長	山口 藤 十
訓導	吉田 正 夫
同	川崎 榮 一 郎 (時攝不在)
同	立石 俊 郎
同	三川 重 治
同	水谷 三 十 一
同	中田 鶴 江
同	草野 幸 三
同	多久 島 干 代 次
同	原 三 三 五 (時攝不在)
代用教員	北 島 三 三 五 (時攝不在)

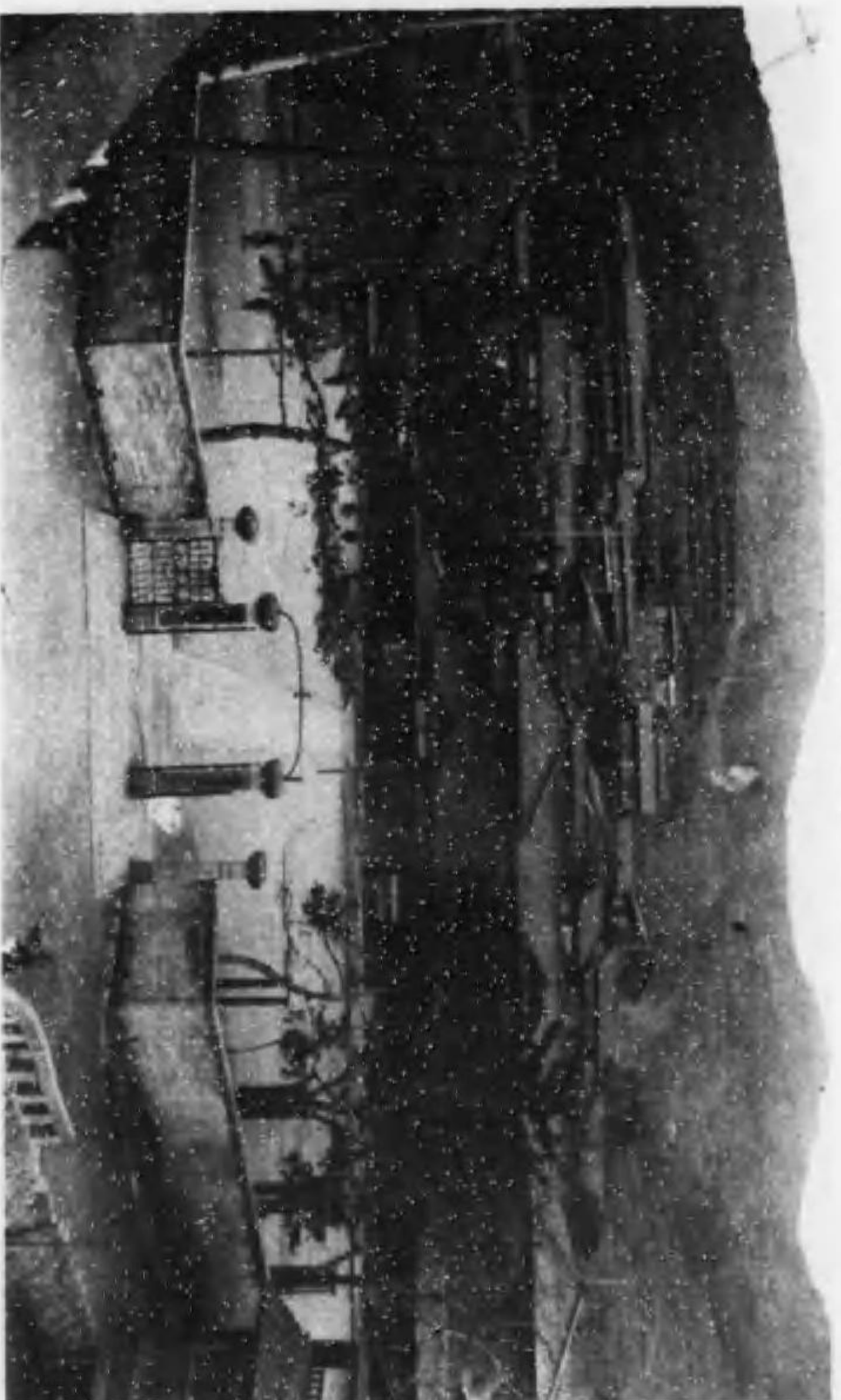
飽浦尋常小學校 (大正十一年二月一日現在)

- 一、創立 明治八年(月日不詳)
 - 二、現在ノ校名ニ變 明治二十八年八月十二日
更セシ年月日
 - 一、明治天皇皇后御影下賜 明治二十六年五月十九日
 - 一、天皇陛下御影下賜 大正六年十月廿日
 - 一、皇后陛下御影下賜 大正六年十月廿日
 - 一、勅語謄本下付 明治二十四年一月廿一日
 - 一、戊申詔書下付 明治四十一年十一月二日
 - 一、校地 六四一坪 運動場 四二六坪
 - 一、學級數 一七 兒童數(男五五九 女五二六)
 - 一、職員(男九 女六)
- 教室數(普通一四 特別〇四)

飽浦尋常小學校職員 (大正十一年二月未調)

訓導長	赤尾松太郎
訓導	富田熊吉
同	小野伊助
同	草野海夫
同	野瀬勲四郎
同	加來眞一
同	江口松太郎
同	丸田サノ
同	松田ツヨ
同	日種ハチ
同	河野キミ
同	高島マミ
同	渡邊フミ
同	江副留助
同	山田長次郎

(臨時不在)

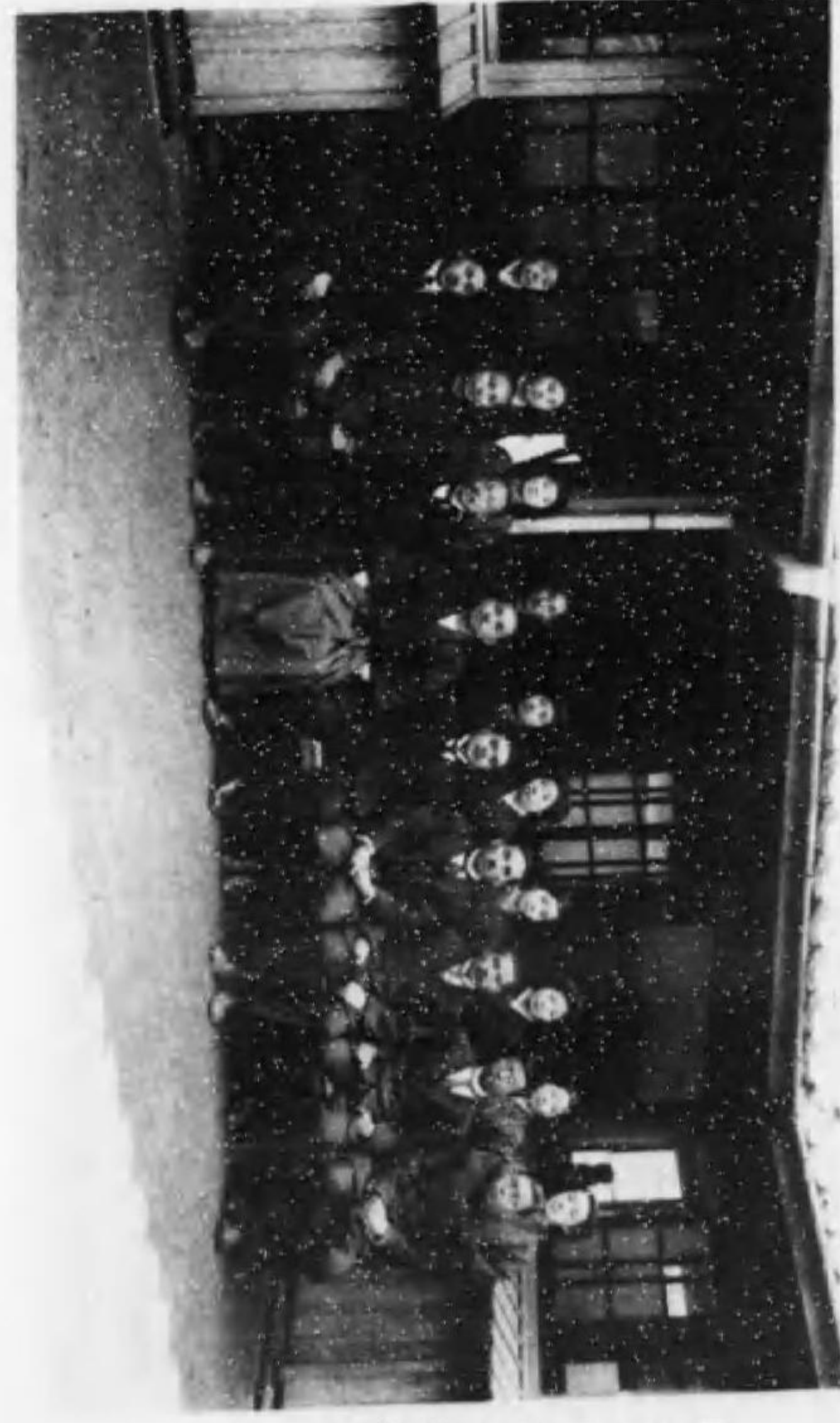


飽浦尋常小學校



飽浦尋常小學校職員

西坂尋常小學校職員



西坂尋常小學校



- 錢座尋常小學校 (大正十二年三月一日現在)
- 一、創立 明治三十五年五月十二日
 - 一、現在ノ校名ニ變
更セシ年月日 明治四十一年四月六日
 - 一、明治天皇皇后御影下賜 明治三十五年十二月廿三日
 - 一、天皇陛下御影下賜 大正六年十月廿日
 - 一、皇后陛下御影下賜 大正六年十月廿日
 - 一、勅語謄本下付 明治三十五年五月十日
 - 一、戊申詔書下付 明治四十一年十一月二日
 - 一、校地 九五五坪餘 運動場 六三〇坪 教室數(普通)一七
特別 〇七
 - 一、學級數 二一 兒童數(男)五九三
(女)六三三
 - 一、職員(男)一〇
(女)八

錢座尋常小學校職員 (大正十二年三月末時)

訓導長	志	賀	親	久
調 導	本	多	界	一
同	富	水	綱	一
同	德	田	修	一
同	秋	月	堂	一
同	吉	宮	強	一
同	高	田	綱	一
同	山	口	フ	シ(時 不在)
同	伊	東	祐	太
同	馬	場	リ	キ
同	近	藤	ノ	ア
同	下	條	コ	ト
同	吉	岡	ア	ノ
同	真	方	ミ	リ
同	山	村	岡	治
代用教員	北	村	野	朗
同	武	居	ア	ノ
同	野	サ	ハ	ハ

長崎幼稚園



長崎幼稚園職員

西坂尋常小學校 (大正十一年二月一日現在)

- 一、創立 大正八年六月二日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正八年十二月廿八日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正八年十二月廿八日
- 一、勅語謄本下付 大正八年十二月廿八日
- 一、校地 三三九〇坪 運動場 一五六〇坪 教室數 (普通) 二〇〇 (特別) 〇〇
- 一、學級數 二〇 兒童數 (男) 五〇三 (女) 五〇三
- 一、職員 (男) 一一 (女) 一〇

西坂尋常小學校職員 (大正十一年二月末調)

訓導長	孫	田	孫	太郎
訓導	相	田	末	松
同	松	本	見	見
同	田	中	正	實
同	榎	原	宗	馬
同	森	實	實	實
同	松	島	英	次
同	谷	口	充	壽 (時攝不在)
同	小	川	紀	六
同	渡	邊		保
同	大	谷	ア	ヤ
同	久	米	キ	ソ
同	安	中	ハ	ヤ
同	湯	川	成	男
同	竹	内	ミ	ソ
同	上	杉	フ	ミ
同	近	藤	ス	エ
代用教員	柿	田	サ	イ
同	奈	真	崎	ハ
同	林	ラ		カ
同	須	田	三	郎 (時攝不在)

長崎市幼稚園

(大正十一年二月一日現在)

- 一、創立 明治二十六年四月一日
- 一、明治天皇皇后御影下賜 明治二十六年九月十六日
- 一、天皇陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、皇后陛下御影下賜 大正六年十月二十日
- 一、勅語謄本下付 明治二十六年九月十六日
- 一、敷地 二三五坪 運動場 一四〇坪 保育室 四 遊戲室 一
- 一、職 員 男一 女四

長崎幼稚園職員

(大正十一年二月末調)

園長	長	直	方	猛
保母	高	高	ス	ミ
同	士	井	幸	子
代用保母	城	後	シ	子
同	竹	井	君	子

(撮影當時不在)

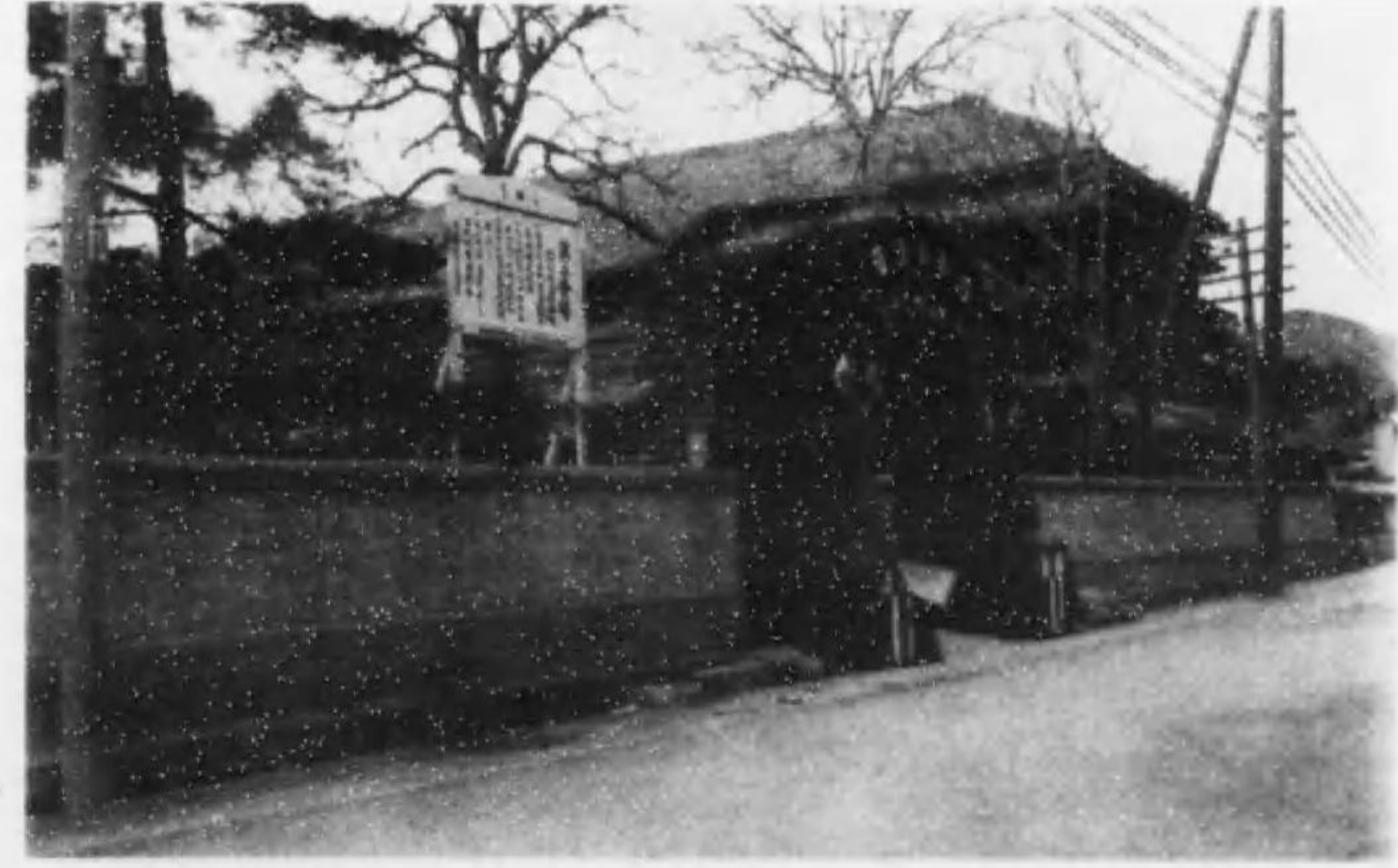


小學校創立五十年記念内外教育展覽會第一會場

委員長



氏徹岡櫛



同上 第二會場

●小學校創立五十年記念
内外教育展覽會

○委員 長

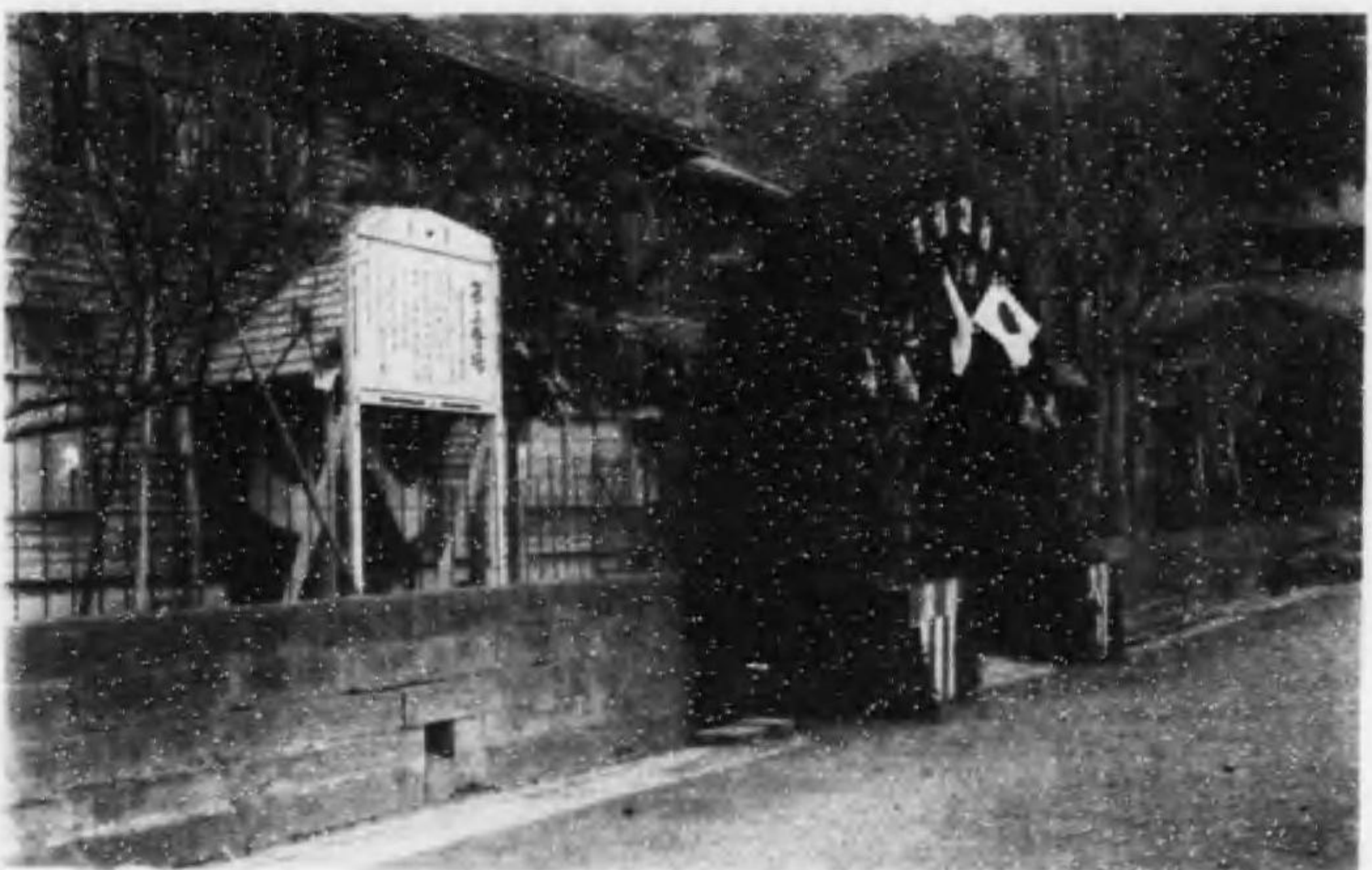
長崎市助役檜岡徹氏ハ大正十一年三月一日ヨリ同十二日マデ
開設ノ展覽會ニ委員長トシテ専ラ事務統理ノ任ニ當ラレタリ

○第一會場

長崎市勝山高等小學校ハ展覽會第一會場トナリ、本市小學
校普通成績品並特殊成績品ニ、内外小學校教科用圖書校地校
舎ノ圖面及各種ノ寫真等三、小學校創立以來ノ教科用圖書其
他ノ記念品等ヲ陳列セリ

○第二會場

長崎市勝山尋常小學校ハ展覽會第二會場トナリ、本市小學
校普通成績品並特殊成績品ニ、本縣他郡市小學校普通成績品
並特殊成績品三、本市及本市小學校教育施設經營ニ關スルモ
ノ四、現代科學ノ進歩ヲ示スベキ器械標本圖解等ヲ陳列セリ



小學校創立五十年記念内外教育展覽會第三會場

篤志家



高見和平日氏



同上 第四會場

●小學校創立五十年記念 内外教育展覽會

○篤志家

長崎市櫻津町高見和平氏ハ還暦記念トシテ金參千圓ヲ教育事業ニ寄附セラレタリ時恰モ小學校創立五十年ニ當リ之ガ記念トシテ大正十一年三月一日ヨリ同十二日マデ内外教育展覽會ヲ開設シテ非常ナル成果ヲ收メタリシガ之ニ要セシ經費ハ主トシテ同氏ノ篤志ニ藉レルモノナリ

○第三會場

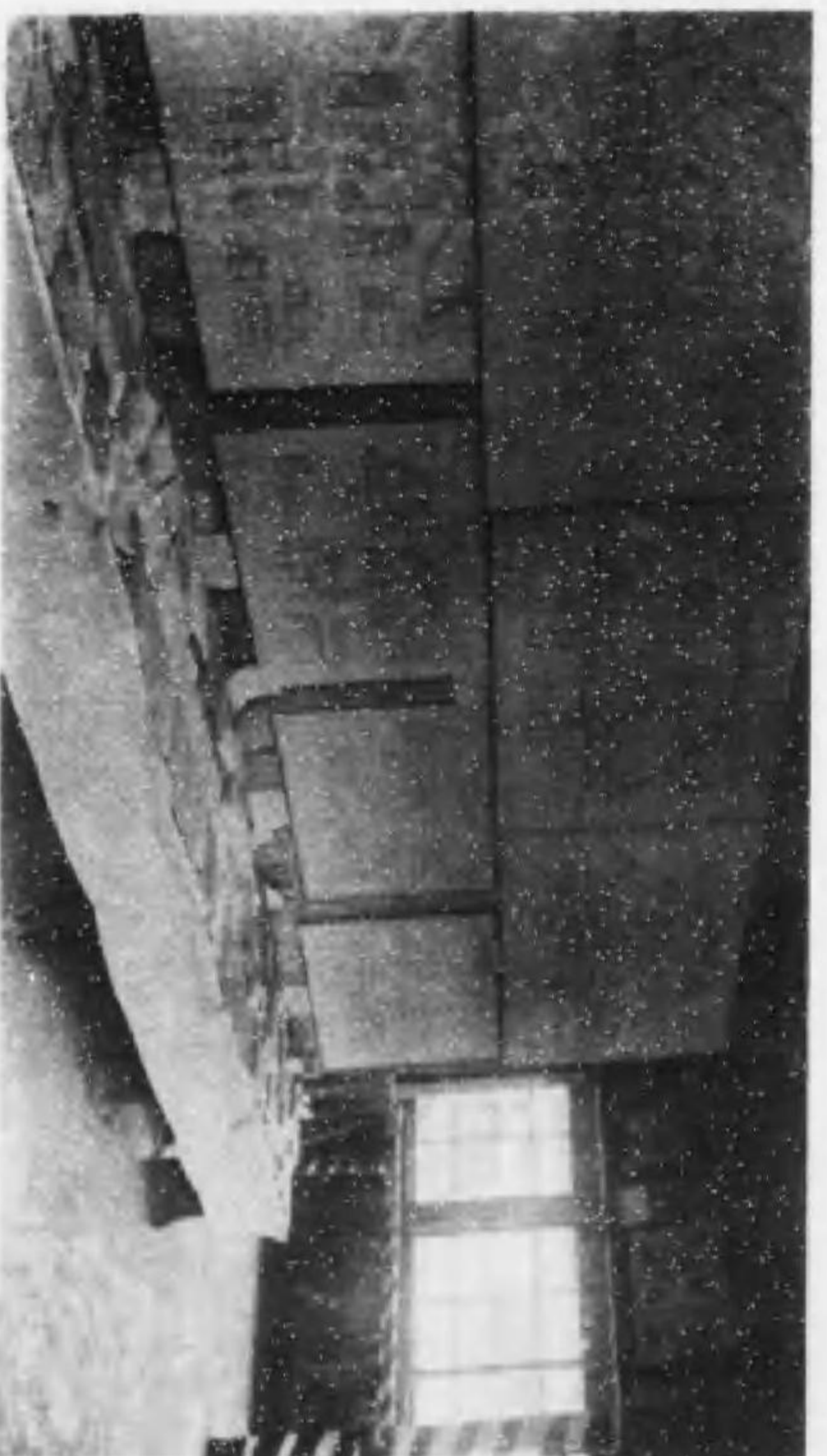
長崎市磨屋尋常小學校ハ展覽會第三會場トナリ一、全國各市區小學校普通成績品、並特殊成績品二、朝鮮、臺灣、樺太、本邦租借地等ノ小學校普通成績品並特殊成績品三、小學校教授用具四、教員、研究、調査、意匠、考案、製作品等ヲ陳列セリ

○第四會場

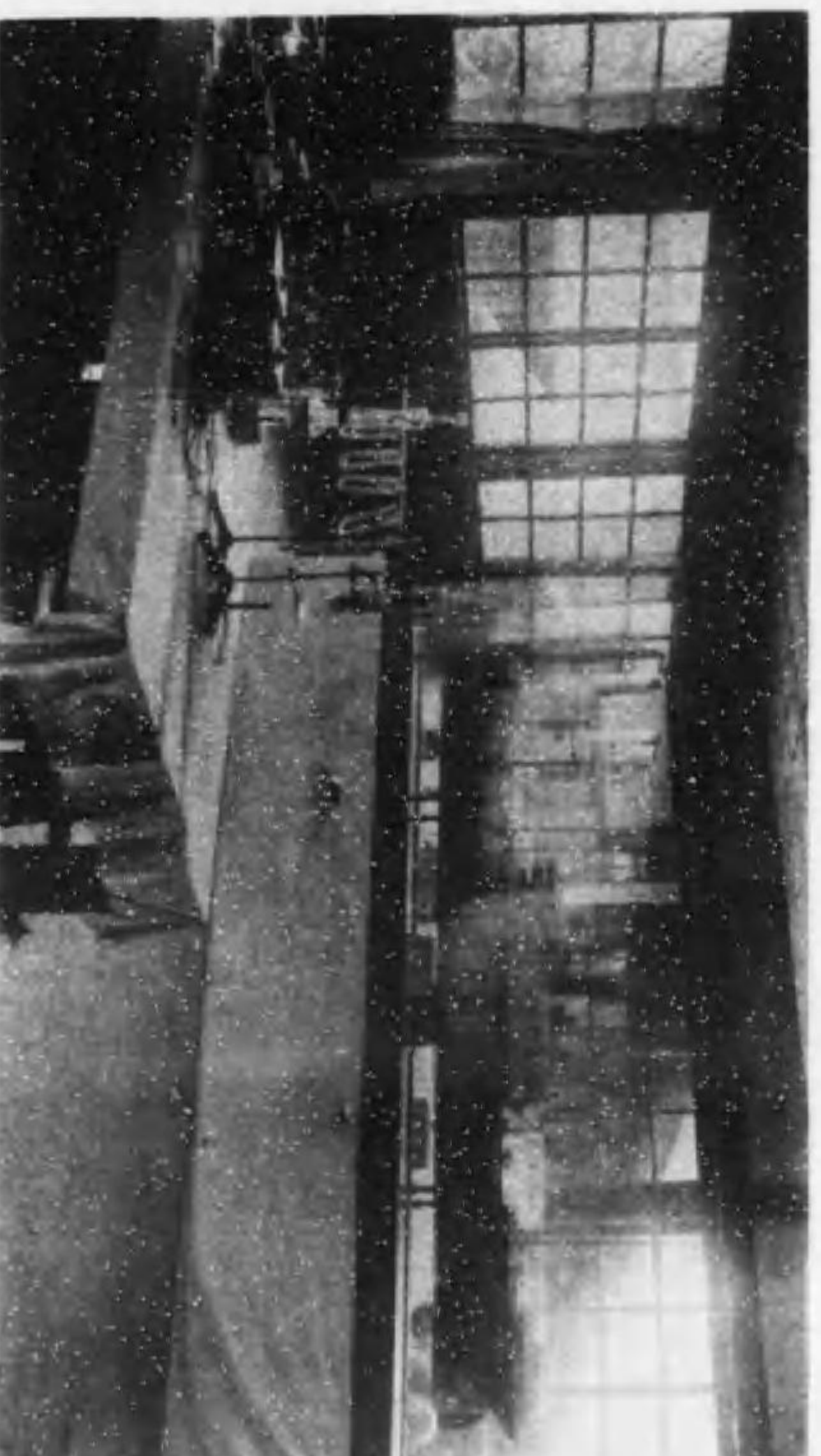
長崎市商品陳列所ハ展覽會第四會場トナレリ一、締盟各國ノ都市各小學校ノ普通成績品並特殊成績品二、各種學用品、玩具、運動用具、課外讀物等ヲ陳列セリ

○附記

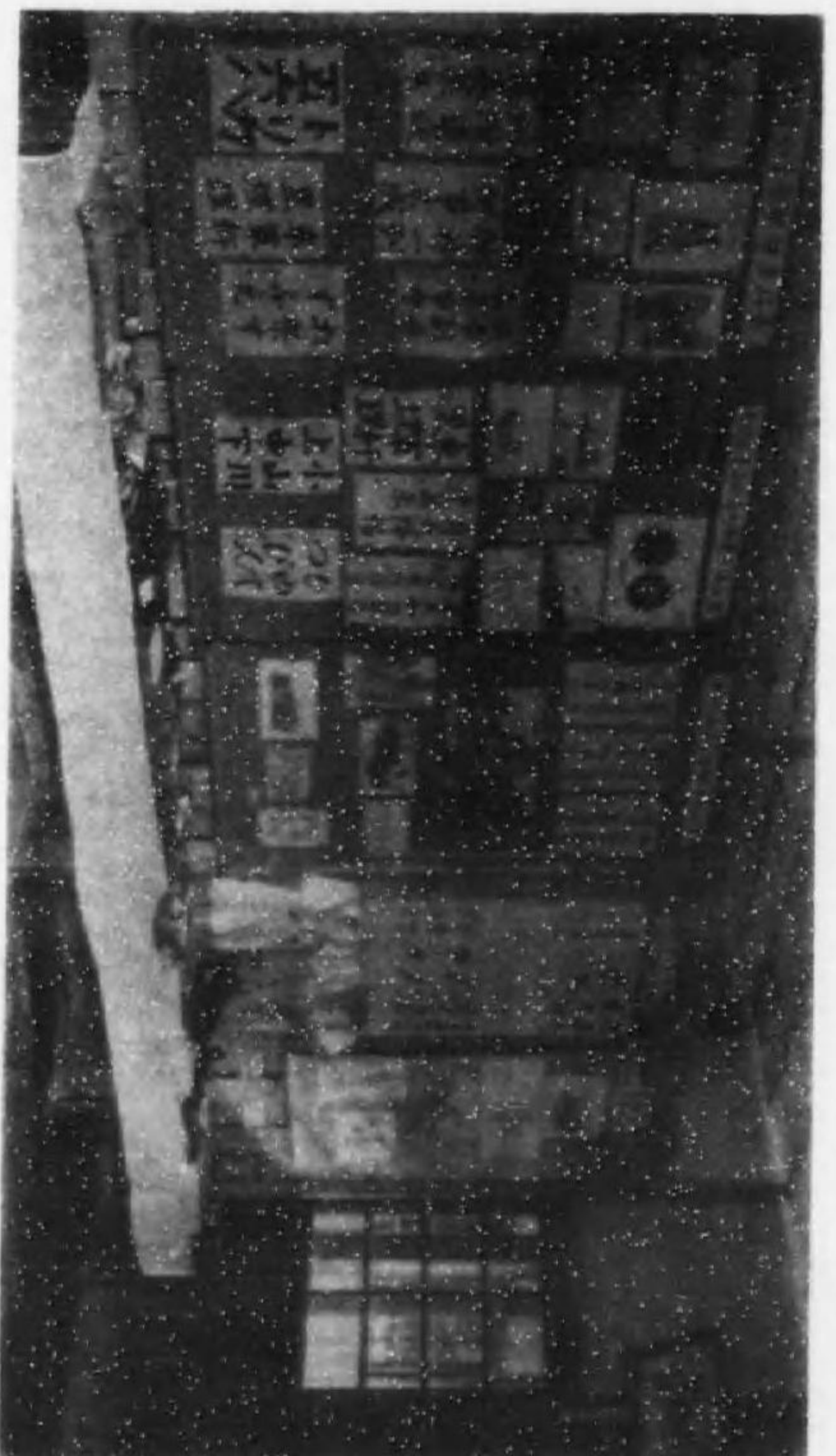
第一、二、三會場トナレル各小學校ハ何レモ創立五十年ノ歴史ヲ有スルモノナリ



第一會場第一會場展覽會教育内外記念館十五立錫校學小市崎長



第一會場第二會場展覽會教育内外記念館十五立錫校學小市崎長



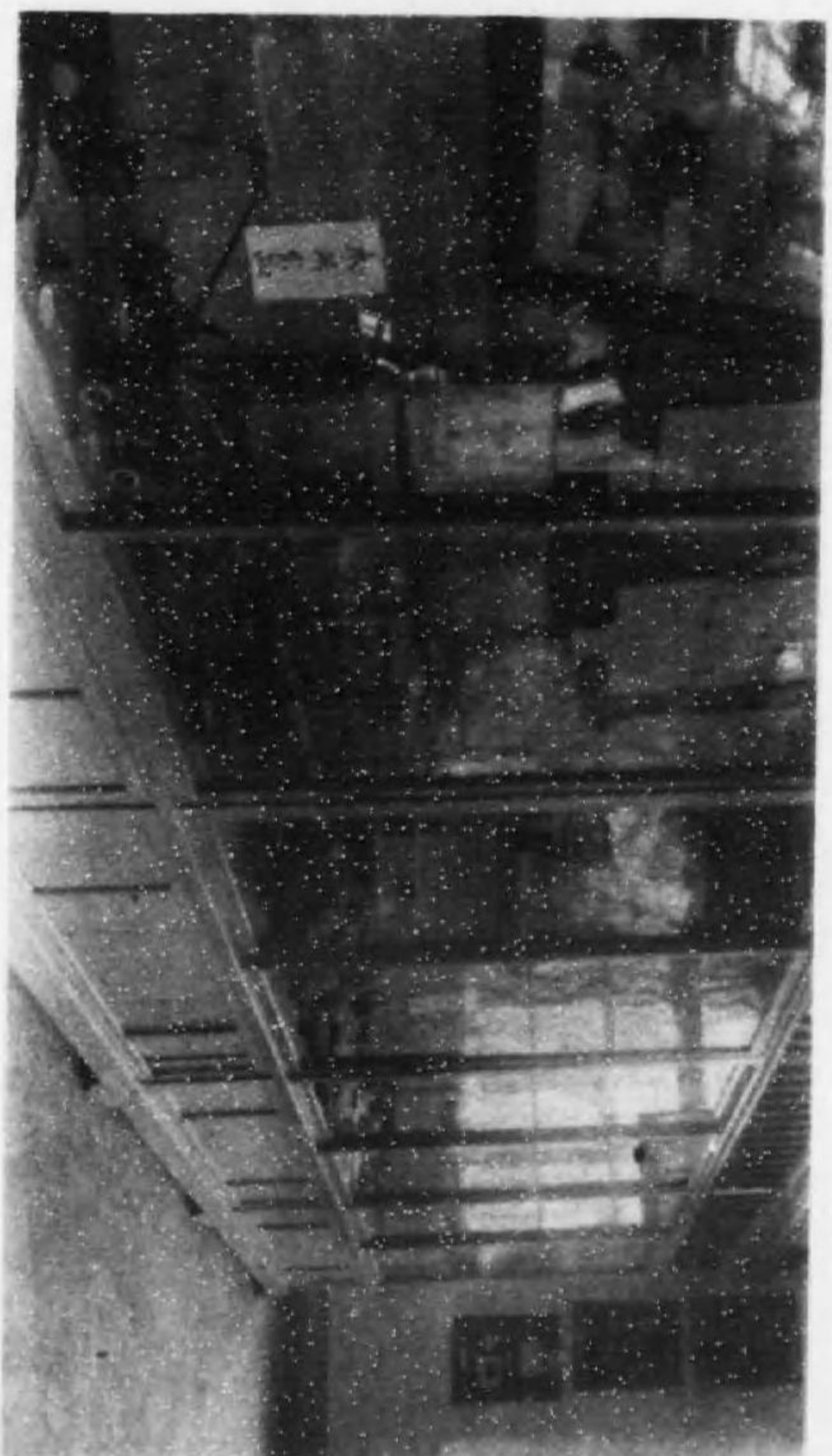
（部）品級收獲量由部名國全/部內場會三第會覽展育教外內念記年十五立創設學小



（一其品級收國外）部內場會四第 上 同



(二其品積或國外)場會四第會覽展育教外內念記立創設學小



(三其) 上 同

長崎市初等教育發達概況

一、往時の教育

我が國における學校教育の起源は、遠く天智天皇の御代にあり。即ち當時學職の官を置かれ、百濟人鬼室集斯をその長官に任じ、學校を建設して朝臣の子弟を教授せしめらる。尋で文武天皇の御代、大寶令によりて京師に大學、諸國に國學の設あり。就も官吏の養成をその目的とす。奈良平安朝に及びて、漸く私學の勃興を見たり。雖、其目的とするところは、文學を弄し、風雅なる氣風を養ひ、上流社會實際の具たる詩文の研究に止りて、これに學ぶもの、亦京師貴族の階級に限られ、未だ庶民の教育は顧みられず。獨り僧空海の開設せし綜藝種智院は、平民教育の濫觴として、一新面を拓きしが、空海の歿後程なく廢頽せり。降りて武家の代となるや、學事漸く頽れ、わづかに京都、鎌倉、五山の僧侶の手に其の壽命を繋ぎたり。唯この間において、金澤文庫と足利學校とは、其使命を完うして學事に貢献せしこと尠からず。されど前者は足利氏時代已に頽廢し、後者のみ辛うじて校務を維持し、以て明治維新に及べり。

尋で徳川の世となるや、幕府は江戸に昌平黌を始めとして各種の學校を建設し、其の公領の地にも亦官學を起せしより、各藩の領主漸く之れに倣ひて濶學を興し、士人の子弟を教育せり。島原の稽古館、大村の五教館、平戸の維新館、福江の育英館等即ち之なり。我が長崎市は、南蠻人の渡來以後、海外互市場として夙に公領に屬し、奉行の管轄下にあり。されば他と異なりて特種の制度文物を有し、教育においても又特有の教育機關を有せり。即ち長崎聖堂をはじめとし、英語傳習所、洋書傳習所、航海測量、算術、砲術、練兵、築城、地理、天文、馬術、繪畫等の傳習所等は其の主なるものとす。斯くて維新前における本市は、本邦唯一の文明地として、天下の青年志士留學し、文物燦然獨り其名を天下に恣にせり。されど市民一般の教育は依然として他地方に異らず、私塾寺子屋を以て唯一の稽古場とせり。抑々寺子屋教育は其内容もとより言ふに足ざるものなり。雖、彼の王朝時代文事が一に貴族の間に限られしに比し、庶民普通教育の機關として、國民の文化に貢献せしこと多大なり。而して所謂寺子屋の教科は讀、書、算の三科にして、就中習字に重きを置き、其教師は手習師匠の稱あり。習字手本は以呂波、名頭、國畫、消息往來、商賣往來、百姓往來、庭訓往來、女子は以呂

波、百人一首、國畫等を用ひ讀方は實語經、三字經、孝經、四書を、女子は今川女大學の類、算術は珠算にして八算、相場割、塵功記等あり、教師は浪人、藩士、神官、僧侶を主とす。かくてこの平民教育は、雖て維新後小學校の根底をなせり。

一、學制の發布と小學校創設

明治四年七月始めて文部省を東京に置き、全國の教育事務を總管し、大、中、小學校の事を管掌せるより、從來の官學、藩學、及私塾、寺子屋の教育は、舉げてこの全國統一の機關に屬し、大に面目を改め、華士族平民等しく就學の門戸開け、倉然として教育の振興を見るに至れり。

(イ)學制の發布

明治五年八月學制を發布し、汎く全國に頒たる、是より先き、明治三年二月大、中、小學の規則を制定せられたりしも、極めて不完全にして成績の見るべきものなく、從つて明治教育の制度は、實に五年八月の學制を以て其の創始と見るべし。かくて全國の教育制度統一せられ、小學校教育の根底始めて確定するに至れり。憶へば上下三千載、未だ曾て一般國民の爲に學事の門戸開かれず、獨り朝臣藩士の子弟のみ其特權に浴して、民間の頑兒其驕足を伸ばすに由なかりし鐵扉、全く解放せられて邑に不學の戸なく、家に不學の人無からしめんとす。適明治の鴻業萬世に光彩を放つといふべし。而して此の學制を頒布せらるゝに當り、允文允武なる明治天皇は特に勅諭を下し其趣旨を諭したまへり。勅諭の全文及太政官の布告左の如し。

人々自ら其身を立て其産を治め其業を昌にして以て其生を遂るゆゑんもの他なし身を修め智を開き才藝を長するに由るなり而して其身を修め智を開き才藝を長するは學にあらざれば能はず是れ學校の設あるゆゑんにして日用常行言語書算を初め士官農商工技藝及び法律政治天文醫療等に至る迄凡人の營むところの事學あらざるはなし人能く其才のあるところに應じ勉勵して之に従事ししかして後初て生を治め産を興し業を昌にするを得べしされば學問は身を立るの財本ともいふべきものにして人たるもの誰か學ばずして可ならんや夫の道路に迷ひ飢餓に陥り家を破り身を喪の徒の如きは畢竟不學よりしてかゝる過ちを生ずるなり從來學校の設ありてより年を歴ること久しといへども或は其道を得ざるよりして人其方向を誤り學問は士人以上の事とし農工商及婦女子に至りては之を度外におき學問の

何物たるを辨せず又士人以上の稀に學ぶものも動もすれば國家の爲にすと唱へ身を立るの基たるを知らずして或は詞章記誦の末に趨り空理虚談の途に陥り其論高尙に似たりといへども之を身に行ひ事に施すこと能ざるもの少からず是れすなはち沿襲の習弊にして文明昔ねからず才藝の長せずして貧乏破産喪家の徒多きゆゑんなり是故に人たるものは學ばずんばあるべからず之を學ぶに宜しく其旨を誤るべからず之に依て今般文部省に於て學制を定め追々教則をも改正し布告に及ぶべきにつき自今以後一般の人民華士族農工商及婦女子必ず邑に不學の戸なく家に不學の人なからしめんことを期す人の父兄たるもの宜しく此意を體認し其愛育の情を厚くし其子弟をして必ず學に從事せしめざるべからざるものなり高上の學に至りては其人の材能に任すといへども幼童の子弟は男女の別なく小學に從事せしめざるも其父兄の態度たるべき事

但從來沿襲の弊學問は士人以上の事とし國家の爲にすと唱ふるを以て學費及其衣食の用に至る迄多く官に依頼し之を給するに非ざれば學ばざる事と思ひ一生を自棄するもの少からず是皆惑へるの甚しきもの也自今以後此等の弊を改め一般の人民他事を抛ち自ら奮て必ず學に從事せしむべき襟心得べき事

右之通被仰出候條地方官に於て邊隅小民に至る迄不洩様便宜解釋を加へ精細申諭文部省規則に隨ひ學問普及致候様方法を設可施行事

明治五年壬申七月

大 政 官

斯くて學制は大中小學區の事、學校の事、小學、中學、大學、教員の事、生徒及試業の事、海外留學生規則の事、學費の事の項目に分れ、第一章より第九章に至り、條項整然として備れり。此制度は範を外國殊に佛國に則りたるものなりといふ、本制度に據れば、長崎縣は佐賀縣、八代縣、白川縣、美々津縣、都城縣、鹿兒島縣、小倉縣、大分縣、福岡縣、三瀨縣と共に第五大區に屬し、然も大學本部として其盟主たる觀あり、中學は各大區に三十二校とし、中學區以下は地方官の定むる所により區分せられ一中區内に學區取締十名乃至十二三名を置き、一名に小學區二十乃至三十を分ち持たしめ、學校の設立、就學督勵、費用の使用等に當らしむ。學區取締は地方官に於て其地の居民名望ある者を任命する規定なり。而して地方官廳に於ては、學務專任の吏員を置き、文部省には督學局ありて管理監督の事務を司る。

初等教育に於ては、學制第二十一章同二十八章に規定せらる。

第二十一章 小學校ハ教育ノ初級ニシテ人民一般必ス學ハスンハアルヘカラサルモノトス之ヲ區分スレハ左ノ數種ニ別ツヘシ然トモ均ク之ヲ小學ト稱ス即チ尋常小學、女兒小學、村落小學、貧人小學、小學私塾、幼稚小學ナリ

第二十二章 幼稚小學ハ男女ノ子弟六歳迄ノモノ小學ニ入ル前ノ端緒ヲ教ルナリ

第二十三章 小學私塾ハ小學教科ノ免許アルモノ私宅ニ於テ教ルヲ稱ス

第二十四章 貧人小學ハ貧人子弟ノ自活シ難キモノヲ入學セシメン爲メニ設ク其費用ハ富者ノ寄進金ヲ以テス是專ラ仁惠ノ心ヨリ組立ツルモノナリ依テ仁惠小學校トモ稱スヘシ

第二十五章 村落小學ハ僻遠ノ村落農民ノミアリテ教化素ヨリ開ケサルノ地ニ於テ其教則ヲ少シク省略シテ教ルモノナリ或ハ年已ニ成長スルモノモ其生業ノ暇來リテ學ハシム是等ハ多ク夜學校タルヘシ

第二十六章 女兒小學ハ尋常小學教科ノ外ニ女子ノ手藝ヲ教フ

第二十七章 尋常小學ヲ分テ上下二等トス此二等ハ男女共必ス卒業スヘキモノトス(教則別冊アリ)

下等小學教科

- 一、綴字 讀並盤上習字
- 二、習字 字形ヲ主トス
- 三、單語 讀
- 四、會話 讀
- 五、讀本 解意
- 六、修身 解意
- 七、書牘 解意並盤上習字
- 八、文法 解意
- 九、算術 九九數位加減乘除但洋法ヲ用フ
- 十、養生法、講義
- 十一、地學大意
- 十二、理學大意
- 十三、體術
- 十四、唱歌 當分之ヲ缺ク

上等小學ノ教科ハ下等小學ノ上ニ左ノ條件ヲ加フ

- 一、史學大意
 - 二、幾何學算術大意
 - 三、博物學大意
 - 四、化學大意
- 其他ノ形情ニ因テハ學科ヲ擴張スル爲メ左ノ四科ヲ斟酌シテ教ルコトアルヘシ

一、外國語學ノ一、二

三、書學

- 二、記簿法
- 四、天球學

下等小學ハ六歳ヨリ九歳マテ上等小學ハ十歳ヨリ十三歳マテニ卒業セシムルヲ法則トス但事情ニヨリ一槩ニ行ハレサル時ハ斟酌スルモ妨ケナシトス

第二十八章 右ノ教科順序ヲ踏マスシテ小學ノ科ヲ授ルモノ之ヲ變則小學ト云フ但私宅ニ於テ之ヲ教フルモノハ家塾トス

此の外教員に關する事項、生徒の進級に關すること、學費に關する規定等あれど、今は之を省略すべし。

(ロ)小學校の創立

明治五年學制の發布ありて本縣廳に學務課を設けられ、翌六年二月荒本伊三次外四名小學校世話係に擧げられ、設備就學、募金、監督の街に當る。同年三月十一日第一番向明小學校を勝山町に、第二番啓蒙小學校を磨屋町に創立し、世話係事務所を向明學校内に置く。尋で第三番楓川小學校を中島聖堂内に置く、この三校は、實に本市小學校の濫觴にして、修業年限八ヶ年、之を上下二等に分ち、各等を入級制とし、各級の修業期間を六ヶ月とす。教科は學則に據りて之を定め、特に土地の事情によりて英語を加設せり。斯くて經費は文部省委託金、縣費、授業料(五錢)及有志の寄附に俟てり。同年九月大中小學區の制を施行せらるゝに及び、本市は第五大區第一中學區第一二、三小學區に屬し、從來の世話係は新に學區取締に任せらる。同年向明小學校内に教員講習所を設置し、市街私塾の教師を集めて教授法を講習す。これ實に本縣師範學校の起原なり。同じ年本田實外三名合資を以て以文會社を向明校の門内に設け、縣下小學校教科書を販賣す。翌七年向明小學校を勝山小學校、啓蒙小學校を舊川小學校、楓川小學校を中島小學校と改稱す。本年始めて學區内に學費を賦課す、其金額貳千參百參拾圓七拾錢なり、斯くて前記の三校は、市民教育の機關として幾多の子女を教養せしが、明治十年三月中島小學校は廢止せられ、勝山校は市勢の發展と共に尋常高等の二校に分立し、舊川校は磨屋尋常小學校と改り、以て今日に及べり。今茲五十年記念内外教育展覽會開催に當り、此の三校を會場に運びしもの實に故なきにあらざるなり。

三、學制發布當時の市政及市況

明治元年奉行を廢して長崎府を設置し、府の行政と長崎市政と分離す。長崎府は翌二年長崎縣と改む。長崎市は明治元年二月町會所を設け、公選を以て各町に肝煎一人を置き、肝煎中年番五人を官選し、以て總町の事務を統べしむ。後肝煎を改めて乙名と云ふ、二年乙名を官選とし、同三年町會所を市郷會所と改む。同五年一月總町を十七區に劃し、各區に町寄一人を置き戸長を兼攝せしめたり、同年六月町年寄兼戸長を廢し、市街を二大區に大別し、其第一大區を八十區に、第二大區を九小區に分ち、毎小區に戸長各一人を置けり。當時如何に行政制度の變革頻煩なりしかを知るべし。かくて同十一年七月郡區町村編制法發布せられ、長崎一圓を長崎區と稱し、區役所を勝山小學校内に設け、家永恭種を區長に任ず。是より市政漸く面目を改めたり。かくて二十二年四月區制を廢して市制を實施し以て今日に及べり。

翻つて當時の市況を案するに、町數九十、人口三萬内外、依然として九州第一の都市たりと雖、之を唐蘭貿易の全盛期たりし、徳川氏中葉時代、人口優に六萬を越わ、海外貿易を獨占して鉅利を博し、市街殷賑を極めて全國羨望の的なりし往時に比すれば、實に今昔の感なき能はず。京濱阪神が地の利を有して、日々隆昌を加ふるに反し天然の良港も已往三百年の尊き歴史も、時運の推移に如何ともする能はず、外國貿易額の如き遙か低位に墜ちて、舊市懐古の地たる觀を呈せり。然るに國運の發展と文化の普及とは、又漸く市勢を復活せしめ、維新當時の人口僅に三萬なりしもの、五十年後の今日將に二十五萬を突破せんとするに至れり。

四、學制發布以後の狀況

(イ)法令の改廢概要

明治十二年九月從來の學制を廢して新に教育令を發布せらる。蓋明治五年學制の規定する處は、全國劃一の形式に流れ、然も地方の實狀に適せず、されば政府は其大綱を定め、實際の細則は地方に委ねんとするにあり。當時自由民權說漸く盛んにして、民心頻に自由を叫ぶ頃なりしかば、教育上にも亦影響するところなきにあらず。法令の改正も、實に此の大勢に動されたるなり。然るに地方に於ては、法の精神を誤解して教育に對し自由放任を馴致し、學制發布以來相當の成績ありし小學校教育を頽弛せしめんとせり。

於是翌十三年更に改正教育令發布せられ、同十四年四月教則を制定せらる。教則は

三章二十七條より成り、第一章小學校の區分、第二章學期授業の日及時、第三章小學校各等科程度を明示し、教育實際家の便に供せり。かくて一方文部省に於て切に教育を獎勵せしため、本邦小學校教育第一次の全盛を見るに至れり。然して本令に於て小學校は從來の上等下等の區別を改めて初等、中等、高等の三等となり、又從來の學區取締は、已に十二年の法令によりて廢止せられ、新に學務委員の制を見たり。

明治十八年又教育令の改正ありしが、未だ施行に至らず、同年十二月政府の組織一變し、大政官を廢して内閣を設けられ、森有禮新に文部大臣に就くや、翌十九年四月小學校令を發し、小學校を分ちて高等尋常の二等とし、修業年限各四ヶ年とせり。

明治二十二年市町村制の制定ありて、地方自治體の制定あるや地方學事通則制定せられ、之に次で二十三年十月勅令第二百十五號を以て小學校令の改定を見るに至れり。本令は全文九十六條より成り、其第一條に「小學校ハ兒童身體ノ發育ニ留意シテ道徳教育及國民教育ノ基礎並其生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トス」即ち現行法令の第一條の規定は此時に設けられたるなり。而して二十四年十一月文部省訓令第十一號を以て小學教則大綱を定められ、同月學級編制に關する規則を設け爾來三十三年八月小學校令改正まで行はれたり。この法令により初めて郡視學を認められ、明治三十三年八月十八日勅令第三百十四號により小學校令を改正せらる。本令は現行法令と其體裁を一にし、從來のものより遙かに完備せるものにして、其後義務年限延長に伴ふ改正を主とし、多少の改廢ありしは勿論なりといへども、同時に布告せられたる施行規則と共に其使命を完うして今日に至れり。

明治四十年三月勅令第五十二號は義務年限を六ヶ年とし、同時に小學校令施行規則の一部を改正し、之れに關する訓令を發せらる。想ふに我國の義務教育年限が歐米諸國に比して其期間短かゝりしは、識者の久しく遺憾とせし所なりき。然るに日露交戦の結果、國威大に掲り、國民向上の機運熟し、こゝに多年の懸案を解決せるものなりかくて教科書の如き學制發布後文部省において刊行せしものありしも、其後久しく之を民間に委したりしが、三十七年四月早くも重なる教科書は同省にて刊行せられ、更に假名遣の問題も以前に復りて、所謂眞に日本國民教育の基礎を固めたり。されど義務教育の年限果して現行のまゝに甘すべきか、時勢の進展は已に早くも八ヶ年延長の急を叫びつゝあるなり。

(口) 學校の増設

明治五年學制發布當時の狀況は已に述べしが、前記三小學校の設立に次で七年には興善小學校新設せられ、九年西山女兒校の前身なる假女學校磨屋町に興り、同十三年小曾根小學校を市に編入し、長崎區學部を勝山學部、興善學部、椋津學部(椋津は啓蒙小學校の改稱なり)に分ち、小曾根小學校は椋津學部に屬し、長崎女兒小學校(磨屋町に創立せし假女學校の改名)は以上三學部聯合の下にあり。是より先本市最初の創設にかゝる中島小學校(楓川小學校の改稱)は勝山校に併合せらる。明治十五年改正教育令により、從來の上下二等制を改めて初等科三ヶ年六級、中等科三ヶ年六級、高等科二ヶ年四級となる。當時本市の人口三萬九千餘、學齡兒童六千餘人、就學兒童一千六百二十三人教育經常費七千六百七拾參圓なり。

明治十九年法令改正の結果、尋常高等各四ヶ年の修業年限となり、第一高等小學校第一高等女兒小學校、尋常勝山小學校、尋常長崎女兒小學校(以上勝山町)尋常興善小學校(本興善町)尋常鶴鳴小學校(磨屋町)尋常小曾根小學校(小曾根町)の七校となる、本年の學齡兒童六千四百四十人、就學兒童二千九百九十二人、教員數は師範學校卒業者男二十六人、女一人、檢定男九人、女一人、雇教員男一人、女二人合計四十人なり。明治二十年長崎幼稚園及磨屋補習學校を創む。同二十一年十善寺小學校を編入す。明治二十三年十月三日第一高等小學校同高等女兒小學校に 天皇皇后兩陛下の御影を下賜せられ、翌二十四年二月十三日小曾根校を除く他の各學校へ勅語股本を下附せらる。明治三十一年市擴張の結果小島、戸町、飽ノ浦、稻佐の各尋常校を編入し、三十四年潤高等小學校を設立す。三十五年伊良林、仁田、錢座の三校を新設し、三十六年大浦女兒尋常小學校(南大浦校の前身)三十七年新町高等小學校を創設す。同年市務課學務係を廢して學務課を獨立し、山本明氏其課長に任じ、教育行政の任にあたる。同年常務學校醫を置き、學校衛生の事務を司る。三十九年佐古尋常高等小學校を立て、四十年立神尋常小學校、四十二年大浦高等小學校(上大浦校の前身)を、大正六年朝日、西坂の兩尋常小學校を設立す。大正八年八月專任視學として大塚鑿氏任命せられ、教育改善指導の任に當る。大正九年隣村浦上山里、上長崎兩村の編入により、上長崎、山里の兩尋常高等小學校を編入す。大正十年關口曉三郎山崎哲三兩氏新に視學に任せられ、圖書、手工、體操の指導に任ず。是より先補習教育機關として磨屋補習學校の

外明治三十七年大浦實業補習學校を、同三十九年錢座實業補習學校を、大正二年飽ノ浦工業補習學校を設立し、七年新町女子實業補習學校の設あり。大正十年山里女子實業補習學校開設せらる。而して今や高等小學校二、尋常高等小學校七、尋常小學校十四、幼稚園一、實業補習學校六を算し、更に十一年度に於て城山小學校の新設せられんとするあり。今之を五十年以前に於ける狀態に比すれば實に隔世の感なき能はざるなり。然も市勢の進展と文運の興隆とは已に現在の狀態に甘んずる能はず。現代教育の新思潮は刻一刻として學校の設備内容に幾多改善を要求して止まず、茲を以て所謂小學校七年計劃案となり、大正十年より七ヶ年に亘りて大刷新を加ふるに至れり。七年計劃案は市勢に伴ふ増加兒童の收容、二部教授の撤廢、義務教育年限延長の場合に處する準備、時代に伴ふ教育施設を考慮せるものにして既設小學校の廢合改築改造、新小學校の設立を企劃し總工費豫算凡三百六拾萬圓、之を七ヶ年の事業として完成せんとするにあり。此の案は學事當事者、教育實際家、専門家の審議に成れるものにして將來本市初等教育界に一新面を拓くものと云ふべし。

五、教育の思潮及實際の變遷

佛、英、米模倣時代(明治初年より二十年頃迄) 明治の初より十二、三年の間は小學教育創業時代にして、獨立の校舍少なく寺院、社殿、又は民家の一部を以て教場に充て教師は私塾の教師、神官、僧侶、浪人若くは町人にして文事あるもの之に當り。教育の方針定らず、教授法の研究無く、正式の師範教育を受けし者其數又寥寥として數ふるに足らず。依然として大勢は寺子屋式たりしなり。彼の明治五年の學制は範を佛國に採り、形式頗る完備せるものありと雖、地方の文化は未だ俄に學制の規定する所に據るを得ず、學制の條文は多く空文に屬せり。されば當時の實狀は一に混沌の語を以て當れりといはんか、然るに明治維新の時代思潮たる開國進取、舊狀打破の新潮は五港の灣頭より浸入して山間僻地に及び、新入先驅者を以て任ずる歐米留學生の歸朝によりて各般の改革となり、教育上に於ては、初め佛國に倣ふ所ありたるもの、今や米國の國風と其思潮とに憧憬して實學主義、主智主義の高潮急速度を以て瀾漫し、明治十二三年以後智育萬能の世となり。從來の形式的道德等は殆んど顧みられずして自然科学的知識と生活上必要なる技能とはその中心となり、教育は實地に必要なる個人を造るを以てその理想とせり、されば修身科の如きは教科價値の順序上第六位に置

かれ、中學校に於ては第十五位に落ち、然も小學校に於いては「修身は口授とし最初の二ヶ年に限りて授くること」と規定せられたり、當時如何に物質文明の吸收に心酔せしかを窺ふべし。かくて從來主として米國に倣ひしもの漸く英國風に移行し、スペンサーの教育説及び其派を汲める米人ジョホノットの教育學等翻譯せられ茲に從來の空虚なる理想主義(亦教主義、人文主義)に反抗して益々智的陶冶を重んじ知識、技能教材の尊重愈々加はり、利用厚生の語は全國に唱道せらるゝに至れり。されどこれもとより直譯的にして教科、教材、教授法、教育行政等一に然ならざるはなし。遮莫當時已にベスタロツヂの名を知らざるものなく開發教授の稱號又全國に響け、從來注入的一式なりし教法の上に一新革命を來せり。歐米の崇拜此の如くにして國粹破壊、自國卑下の風潮益々加はり、婦人洋裝、男女自由交際、女尊男卑、夜會舞踏、野合等一にして足らざる社會奇現象を生じ、所謂歐化主義の極端に達せり。茲において國粹保存主義乃至國粹發揮主義勃然として擡頭せり。第一期に於ける大要斯の如し。更に此の期に於いて政府が銳意教育の振興に努め、法令の改革を行ひ、小學校教則を廢して小學校教育の要領を示し、小學校教員心得を出して教師の嚮ふ處を諭し、加之學事獎勵の名を以て、全國の小學校及教員に獎勵品を下付し、督責勵行兼ねたるは注意すべきことなり。我が長崎市に於ても、明治十六年勝山男女兩校及興善校に對して其下附ありしことは人の知るごころなり。之を要するに、此期は混沌時代より發して英米模倣時代、智育萬能時代を現出せりといふべく、其個人的立場より所謂個人的教育時代と稱すべし。

獨逸模倣時代(明治三十年頃より卅五六年頃迄)此の時期は漸く自國の存立と其の文化の價値を認識し、從來の盲目的沒批判的模倣より一進して、自覺的に歐米先進國の文明を輸入せし時代にして、思想界の中心が英國よりも寧ろ獨逸に傾き、個人主義實利主義より國家主義、道德主義に移行せるを著しき現象なりとす。是れ我國の國體が英米の夫よりも獨逸に相通ふ所多く、福澤流の破壊主義、急進主義が動もすれば、國粹を全滅し、國本を危くする所なきにあらざるを以て、早くも之と對抗すべく所謂國粹保存主義の思想を生み、然も國情相似せる獨逸に倣はんとするは又當然の歸結といふべし。國粹保存主義乃至は日本國家主義は加藤弘之氏をはじめ井上哲次郎氏其他學者、識者の間に唱道せられ、從來の個人主義、極端なる自由民權論に對抗して、歴

史を尊重し國體を擁護し、日本國家主義てふ大傘下に先進國の文化を攝取せんとするにあり。この主義は明治二十年以後漸次高潮せられ、三十年頃に至りて日本主義なる名稱の下に一段の活氣を呈したり。されどまもなく反對論を生み、遂に相争うて第三期に及べり、翻つてこの國家的道德的教育の建設に最大の力を致したるは、文部大臣森有禮氏其人なりとす。氏は教員の養成に力を注ぎ、師範學校の生徒に順良、信愛、威重の三徳を強ひ、獨逸式軍隊体操を課し、生徒の起臥衣食、行動等凡て兵式的に改め秩序を尊び規律を重するの風を養ふ等、當時の師範學校は恰も兵營の夫れの如き觀ありき。されば小學校の教育も亦之に倣ひて、兵式体操に重きを置き行軍、演習、軍歌等恰も少年義勇軍の様なりき。各地小學校々庭に體操器械を設置し、啞鈴球竿、棍棒等の獨逸式運動具の設備は、實に此の期の特色を語るものなり。かくて從來知育の一方に偏したる學風は、身體的鍛練を重んじ、其の道德的教育と相俟ちて教育上一大改革を見たり。即ち第一期時代の特色たる主知的、實利的個人的主張は茲に國家的、道德的と化せり。この思潮は明治二十三年の教育勅語喚發によりて確定的狀態となり一般國民の嚮ふ所定まりて教育は勅語の御趣旨を奉体、服膺するを生命とするに至れり。

これより先品性陶冶を主張するヘルバルトの教育説漸く勢力を得、其道德的人物養成の標榜は常に教育勅語の喚發によりて愈々光彩を放ち、所謂ヘルバルト全盛期となり。されば苟も教壇に立つ者五段教授法の名稱を知らざるなく、道德的品性陶冶の聲は全國に轟けり。されどヘルバルトの教育は個人的にして然も形式に流るゝ嫌あり是を以て斯學の研究進むに従ひ、漸く勢力を失ひ明治三十年代の中葉以後は己に舊説に屬するに至れり。

次にこの時代において注意を要すること二、三にして足らずと雖其主なるものを數ふれば、明治三十三年の法令によりて試験制度を全廢し、言文一致の文章を許し、歴史的假名遣を廢して發音的となし、更に所謂棒引を許容せられしこと之なり。又一方漢字の數を節減せしことも、時代思潮を語る一なりとす。更に奇しきは遊戯の流行全盛を極め、寒村僻地の學校に於てすら舞踏的遊戯の教授を見ざるなきに至れることにして、恰も森文部大臣が銃劍術を傳習せしめたるご前後の二大奇觀と云ふべきか。

教育思想獨立時代(明治三十一年代の中葉より明治の末葉迄)久しく全盛を極めし

獨逸式教育も、時運の推移と共に其影薄く、ヘルバルト流の教育説又漸く勢を失ひ、親しく同氏の説を宣傳せし學者先輩の思想も、幾多の新思想と國家の隆運とによりて從來の直譯的舊套を蟬脱し、茲に所謂渾然たる日本式教育の思想を確立し、實利教育、道德教育、身体的教育、審美的教育等皆その長を採り短を捨て、さては學校の設備内容も徒らに外來の思想に動かされず、ごもすれば極端なりし學説も、漸く調和融合せられて今日普通教育實際の根底を固めたり。彼のヘルバルト主義第一人者たりし谷本博士の如き、其説く所頗る調和的に轉せしを以てしても其一般を窺ふに足るべし。然してこの自主獨立的教育思想を促進せしめたるは、實に三十七八年戰役の賜といはんか、この戰爭によりて國民の大自覺を促し、歐米文明以外に尊き日本文明あることを教へたること言ふを俟たざるなり。されば外來の新思潮に對して、今や破邪顯正の態度を取り、明治五十年間における新文明の獨立と共に、教育の思想儼然たるものあるに至れり。而してこの間教育學説として漸く世人の視聽を惹きしは、社會的教育學説なり、此の説は三十年代の中葉より四十年の初に亘りて盛んに唱導せられ、ヘルバルト派の沒社會的なりしを難じ、教育現象を以て一種の社會的現象と見做し、教育の目的は社會的團體の一員として價值ある人間を造るにありと主張せり。而してかの有名なる五段教授法衰へて三段の形式を採り、學校に於て早くも三段教授法の流行を見たれり此の説はベルゲマン、ナトルプ氏等の主唱に由り熊谷、樋口、吉田氏等によりて宣傳せられたるものなり。當時我國の上下が獨逸式國家主義に固まりて、社會的方面を闕却せし時代なりしより、この新思潮は滔々として發展せり。是より以降教育學説の應對に遑なく、或は著書に雜誌に新聞に陸續發表せられて底止する處を知らず。されど大勢は已に定まりて大瀨、森岡、溝淵、小西氏等の所謂調和的教育説及澤柳博士の實際的教育説等この時代を代表して、實際教育家の胸中已に自信あり。次に當時の實際を稽ふれば、國定教科書の制定あり、義務年限の延長あり、戊申詔書の煥發せらるゝあり、國語問題の處理あり、体操の改革あり、地方における校長講習、正教員の指導講習あり。教育實際家の眼中已に一流一派に泥まず、よく地方の狀況と實際の境遇とによりて其最善を竭せり。然りと雖その實際は形式に重きを置き、未だ深く内容の改善に入らず、縣郡視學の眼中亦法規、命令の傳達督責に捕はれ、表簿の檢閲書類の整理等を以て其の視察の主要目的とせる感ありき。

現代(大正の初より現今に至る)明治五十年間に養はれたる教育的自覺は、常に教育者のみならず、普く國民の腦裡に徹底して學校設備の完成を期し家庭教育の向上を圖り、内外相應じて子女教養の任を達せんとするに至れり。されば從來教育に無關心たりし父兄保護者も、學校教育助長の後援者となり、學校當事者又よく内容改善を劃し、監督指導の地位に在る者、亦専ら力を實績向上に致し、將に歐米先進國に對抗して寧ろ其上に出でんとするの氣勢を示せり。されば從來對内國的なりしものは對外的となり、姑息的、皮相的、形式的、羅列的なりし事項は、根本的徹底的實際的科學的に移り、設備の完成、内容の改善に目も足ざる状態となれり。是れ一に歐洲大戰の經過乃至は其結果に由ること勿論なりと雖、一般文化の進歩殊に兒童に關する研究の進歩によりて、教育實際の上に當然招來すべき問題たりしなり。即ち前期に於て我國の教育思想は、已に其向ふ處明瞭となり、日本の教育の根據早も確立せりと雖、其實際に於ては形式に捕はれ、外觀の美と内容の實状とは未だ必しも相伴はず、依然として教育は教師中心たるの觀ありき。然るに兒童學、兒童心理學等の科學的研究は、遂に從來の範を破りて兒童中心の思潮を高唱し、この基調に據りて學習改善の革新を起すに至れり。かくて一方に社會の一大推移あり、國家の進運隆々たるものありて、教育の事業漸く多忙を極むるに至れり。而して此の期において吾人の注意を惹きし新教育の思潮を擧ぐれば、特種兒童の教育思潮、實驗教育等の思潮、美的藝術的教育思潮、新個人的思潮、人格的教育思潮、公民的教育思潮、勤勞主義思潮、自動的教育思潮、分團的教育思潮、自由的教育思潮、創造教育思潮等とす。而して此等の思想、主義、提案は教育實際の上に隨時隨所に現れ、各種の改變進化を促せり。されど調和的なる我が教育の根底は、之等の新説によりてその覆滅を見ることなく、忠實穩健の態度によりて類化融合し、著々として時勢順應の實を擧げ來たれり。抑も公民的教育學説は湯原、上石、乙竹、川本氏等の宣傳に出でたるものにして、當時我國上下を通じて、立憲思想の養成、經濟思想の涵養に熱中せしさま思ひ合すべし。自動的教育説は自力を以て自己を教育發展せしめんとするものにして、自學主義は勿論、作業主義、發表主義、創造主義等も亦其意相通するものあり。この思想は近世のルソー、フレーベルを始めモンテッソー、ケーの兩女史等、所謂現代の兒童中心派によりて唱導せられしものにして、全國到る所に高唱せられ、自學自習の聲は大流行を呈せり。更に及川氏の分團式

動的教育説は亦全國に検討せらるゝに至れり。
 是を要するに從來の教師本位の教育が俄然として兒童本位に移りたることに實に現代の一革新と云ふべく、全國到處學習法改善の講習研究に日もこれ足らざる狀況なり。翻つて過去十年間に於ける教育事實として擧ぐべきは、理化學思想の勃興に伴ふ小學校の設備及内容の改善体育に關する改善設備等は其主なるものにして、全國共通の大勢なり。この二者は一に社會の趨勢、國家の要求より急速の進歩をなしたるものなりといへども、兒童中心の思潮に出でたること勿論なり。兒童實驗、体育向上の聲今尚鳴を静めず。更に從來の歴史的事實として傳ふべきは、歐洲大戰に伴ふ經濟界の好況により、男子教員の轉職者頻出し、之に代りて女教員の數著しく増加せしことなり。而してこの狀勢は一般の漸く憂ふる所となり、教育尊重、教員優遇、義務教育費國庫補助問題となり各種の運動を起せり。

最後に附記すべきは、此の期における各種教育施設の勃興なりとす。通俗教育、青年教育、市民教育、農村教育等をはじめ、各種教育團體の組織、青年團處女團の創設等隨時隨所に興りて學校教育と相俟ち、所謂大國民の教養啓蒙に資せんとすることとなり、尙デモクラシーの思想が前古未曾有の勢力を以て瀾漫せることは、思想上の一大變動なりとす。

六、現今の學事 (大正十年七月の長崎市學事一覽による)

地域	戸口	學齡	兒童		學事		教員		給俸		功加	
			就學	未就學	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
			合計	合計	男	女	男	女	男	女	男	女
東區	二里五丁	一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇	一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇	一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇	一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇	一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇	一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇	一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇	一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇	一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇	一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇	一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

算 預 費 市												算 預 費 市											
費 時 臨						費 校 學						入 收						出 支					
費 助 補 展 電 身 校 校 學 退 請						費 雜 費 費 費 費 費 費						市 寄 雜 報 補 國 使						幼 山 新 錦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦					
市 市 市 市 市 市						幼 實 商 小 種						市 市 寄 雜 報 補 國 使						幼 山 新 錦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦					
市 市 市 市 市 市						幼 實 商 小 種						市 市 寄 雜 報 補 國 使						幼 山 新 錦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦					
...										
...												...											
...												...											

算 預 費 市												算 預 費 市											
費 時 臨						費 校 學						入 收						出 支					
費 助 補 展 電 身 校 校 學 退 請						費 雜 費 費 費 費 費 費						市 寄 雜 報 補 國 使						幼 山 新 錦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦					
市 市 市 市 市 市						幼 實 商 小 種						市 市 寄 雜 報 補 國 使						幼 山 新 錦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦					
市 市 市 市 市 市						幼 實 商 小 種						市 市 寄 雜 報 補 國 使						幼 山 新 錦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦 大 浦					
...										
...												...											
...												...											

長崎市現住人口累年比較表

年次	戸數		人口	
	男	女	男	女
明治十二年	六,六六九	六,五五九	一三,二二八	一三,一八八
同十三年	六,五五九	六,四四九	一三,一〇八	一三,一〇八
同十四年	六,四四九	六,三三九	一三,〇〇八	一三,〇〇八
同十五年	七,〇〇七	六,九〇七	一三,九一四	一三,九一四
同十六年	七,〇〇七	六,九〇七	一三,九一四	一三,九一四
同十七年	六,九〇七	六,八〇七	一三,七一四	一三,七一四
同十八年	六,八〇七	六,七〇七	一三,五二〇	一三,五二〇
同十九年	六,八〇七	六,七〇七	一三,五二〇	一三,五二〇
同二十年	六,八〇七	六,七〇七	一三,五二〇	一三,五二〇
同二十一年	六,八〇七	六,七〇七	一三,五二〇	一三,五二〇
同二十二年	九,一八〇	九,〇七〇	一八,二五〇	一八,一四〇
同二十三年	九,一八〇	九,〇七〇	一八,二五〇	一八,一四〇
同二十四年	九,一八〇	九,〇七〇	一八,二五〇	一八,一四〇
同二十五年	九,一八〇	九,〇七〇	一八,二五〇	一八,一四〇
同二十六年	九,一八〇	九,〇七〇	一八,二五〇	一八,一四〇
同二十七年	九,一八〇	九,〇七〇	一八,二五〇	一八,一四〇
同二十八年	九,一八〇	九,〇七〇	一八,二五〇	一八,一四〇
同二十九年	九,一八〇	九,〇七〇	一八,二五〇	一八,一四〇

學務委員	公立					私立					身體檢查概況														
	種別	人員	給與	種別	人員	種別	人員	給與	種別	人員	種別	人員	給與	種別	人員	給與	種別	人員	給與	種別	人員	給與			
學務委員	校長	1	1	校長	1	校長	1	1	校長	1	校長	1	1	校長	1	1	校長	1	1	校長	1	1	校長	1	1
	教員	1	1	教員	1	教員	1	1	教員	1	教員	1	1	教員	1	1	教員	1	1	教員	1	1	教員	1	1
公立	高等女學校	1	1	高等女學校	1	高等女學校	1	1	高等女學校	1	高等女學校	1	1	高等女學校	1	1	高等女學校	1	1	高等女學校	1	1	高等女學校	1	1
	中學校	1	1	中學校	1	中學校	1	1	中學校	1	中學校	1	1	中學校	1	1	中學校	1	1	中學校	1	1	中學校	1	1
私立	女子師範學校	1	1	女子師範學校	1	女子師範學校	1	1	女子師範學校	1	女子師範學校	1	1	女子師範學校	1	1	女子師範學校	1	1	女子師範學校	1	1	女子師範學校	1	1
	師範學校	1	1	師範學校	1	師範學校	1	1	師範學校	1	師範學校	1	1	師範學校	1	1	師範學校	1	1	師範學校	1	1	師範學校	1	1
私立	高等商業學校	1	1	高等商業學校	1	高等商業學校	1	1	高等商業學校	1	高等商業學校	1	1	高等商業學校	1	1	高等商業學校	1	1	高等商業學校	1	1	高等商業學校	1	1
	醫學專門學校	1	1	醫學專門學校	1	醫學專門學校	1	1	醫學專門學校	1	醫學專門學校	1	1	醫學專門學校	1	1	醫學專門學校	1	1	醫學專門學校	1	1	醫學專門學校	1	1
私立	中學校	1	1	中學校	1	中學校	1	1	中學校	1	中學校	1	1	中學校	1	1	中學校	1	1	中學校	1	1	中學校	1	1
	備前學校	1	1	備前學校	1	備前學校	1	1	備前學校	1	備前學校	1	1	備前學校	1	1	備前學校	1	1	備前學校	1	1	備前學校	1	1
私立	工業學校	1	1	工業學校	1	工業學校	1	1	工業學校	1	工業學校	1	1	工業學校	1	1	工業學校	1	1	工業學校	1	1	工業學校	1	1
	神學大學	1	1	神學大學	1	神學大學	1	1	神學大學	1	神學大學	1	1	神學大學	1	1	神學大學	1	1	神學大學	1	1	神學大學	1	1
私立	英語學校	1	1	英語學校	1	英語學校	1	1	英語學校	1	英語學校	1	1	英語學校	1	1	英語學校	1	1	英語學校	1	1	英語學校	1	1
	女子專門學校	1	1	女子專門學校	1	女子專門學校	1	1	女子專門學校	1	女子專門學校	1	1	女子專門學校	1	1	女子專門學校	1	1	女子專門學校	1	1	女子專門學校	1	1
私立	高等女學校	1	1	高等女學校	1	高等女學校	1	1	高等女學校	1	高等女學校	1	1	高等女學校	1	1	高等女學校	1	1	高等女學校	1	1	高等女學校	1	1
	健學學校	1	1	健學學校	1	健學學校	1	1	健學學校	1	健學學校	1	1	健學學校	1	1	健學學校	1	1	健學學校	1	1	健學學校	1	1
私立	合計	1	1	合計	1	合計	1	1	合計	1	合計	1	1	合計	1	1	合計	1	1	合計	1	1	合計	1	1
	合計	1	1	合計	1	合計	1	1	合計	1	合計	1	1	合計	1	1	合計	1	1	合計	1	1	合計	1	1
私立	幼稚園	1	1	幼稚園	1	幼稚園	1	1	幼稚園	1	幼稚園	1	1	幼稚園	1	1	幼稚園	1	1	幼稚園	1	1	幼稚園	1	1
	合計	1	1	合計	1	合計	1	1	合計	1	合計	1	1	合計	1	1	合計	1	1	合計	1	1	合計	1	1

學務委員			公立諸學校					私立諸學校						
種別	人員	給與	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立
高等女學校	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
中學校	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
女子師範學校	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
師範學校	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
高等商業學校	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
醫學專門學校	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
種別	人員	給與	種別	人員	給與	種別	人員	給與	種別	人員	給與	種別	人員	給與
校長	1	1	校長	1	1	校長	1	1	校長	1	1	校長	1	1
教員	1	1	教員	1	1	教員	1	1	教員	1	1	教員	1	1
合計	2	2	合計	2	2	合計	2	2	合計	2	2	合計	2	2

長崎市現住人口累年比較表

年次	戸數	人口		計口
		男	女	
明治十二年	6,669	3,335	3,334	6,669
同十三年	6,556	3,278	3,278	6,556
同十四年	6,336	3,168	3,168	6,336
同十五年	7,035	3,517	3,518	7,035
同十六年	6,894	3,447	3,447	6,894
同十七年	6,977	3,488	3,489	6,977
同十八年	7,003	3,501	3,502	7,003
同十九年	7,003	3,501	3,502	7,003
同二十年	6,823	3,411	3,412	6,823
同二十一年	6,823	3,411	3,412	6,823
同二十二年	9,333	4,666	4,667	9,333
同二十三年	9,183	4,591	4,592	9,183
同二十四年	9,234	4,617	4,617	9,234
同二十五年	9,368	4,684	4,684	9,368
同二十六年	9,482	4,741	4,741	9,482
同二十七年	9,557	4,778	4,779	9,557
同二十八年	9,557	4,778	4,779	9,557
同二十九年	9,557	4,778	4,779	9,557
同三十年	9,557	4,778	4,779	9,557
同三十一	1,655	827	828	1,655
同三十二	1,851	925	926	1,851
同三十三	1,851	925	926	1,851
同三十四	1,997	998	999	1,997
同三十五年	2,048	1,024	1,024	2,048
同三十六	2,158	1,079	1,079	2,158
同三十七	2,209	1,104	1,105	2,209
同三十八	2,260	1,129	1,130	2,260
同三十九	2,311	1,154	1,155	2,311
同四十	2,362	1,179	1,180	2,362
同四十一	2,413	1,204	1,205	2,413
同四十二	2,464	1,229	1,230	2,464
同四十三	2,515	1,254	1,255	2,515
同四十四	2,566	1,279	1,280	2,566
大正元年	2,617	1,304	1,305	2,617
同二	2,668	1,329	1,330	2,668
同三	2,719	1,354	1,355	2,719
同四	2,770	1,379	1,380	2,770
同五	2,821	1,404	1,405	2,821
同六	2,872	1,429	1,430	2,872
同七	2,923	1,454	1,455	2,923
同八	2,974	1,479	1,480	2,974
同九	3,025	1,504	1,505	3,025
同十	3,076	1,529	1,530	3,076

備考 一、明治二十六年以前は男女の數明かならず
二、本表は各年末の調査なり

學校及職員累年比較表

年次	小學校		計	職員		計
	尋常	尋常高等		男	女	
明治六年						
同七年						
同八年						
同九年						
同十年						
同十一年						
同十二年						
同十三年						
同十四年						
同十五年						
同十六年						
同十七年						
同十八年						
同十九年						
同二十年						
同二十一年						
同二十二年						
同二十三年						
同二十四年						
同二十五年						
同二十六年						
同二十七年						
同二十八年						
同二十九年						
同三十年						
同三十一年						
同三十二年						
同三十三年						
同三十四年						
同三十五年						
同三十六年						
同三十七年						
同三十八年						
同三十九年						
同四十年						
同四十一年						
同四十二年						
同四十三年						
同四十四年						
大正元年						
同二年						
同三年						
同四年						
同五年						
同六年						
同七年						
同八年						
同九年						
同十年						
同十一年						
同十二年						
同十三年						
同十四年						
同十五年						
同十六年						
同十七年						
同十八年						
同十九年						
同二十年						
同二十一年						
同二十二年						
同二十三年						
同二十四年						
同二十五年						
同二十六年						
同二十七年						
同二十八年						
同二十九年						
同三十年						
同三十一年						
同三十二年						
同三十三年						
同三十四年						
同三十五年						
同三十六年						
同三十七年						
同三十八年						
同三十九年						
同四十年						
同四十一年						
同四十二年						
同四十三年						
同四十四年						
同四十五年						
同四十六年						
同四十七年						
同四十八年						
同四十九年						
同五十年						

備考 一、明治六年より同十四年迄は上等小學、下等小學と稱し同十五年より同十八年迄は初等、中等、高等の區別ありしを便宜上これを尋常、高等の中に包含せしめたり
 二、明治三十三年以前は職員男女別同十九年以前は職員數不明なり

學齡兒童及在學兒童累年比較表

年次	學齡兒童		就學百分比		在學兒童		出席百分比	
	男	女	男	女	男	女	男	女
同三十二年	六,七〇三	五,三〇〇	二一,九三三	六,八七五	七二,七七七	三,六〇六	六,一五五	九〇,五五
同三十三年	五,三九二	四,四〇三	九,七九五	八,〇一九	八四,八八五	三,四四一	八,三三三	八七,五三
同三十四年	五,〇二七	四,三〇三	九,三三〇	九,三〇九	九四,八八九	三,四〇三	七,八七三	八三,三三
同三十五年	六,〇六一	五,二九一	一一,九〇〇	九,七七七	九四,八四一	四,八四一	八,七三二	八七,五三
同三十六年	六,一九五	五,三七七	一二,五七三	九,〇二二	九六,〇四二	四,九七三	九,〇二二	八九,五八
同三十七年	六,三二八	五,五八三	一一,九〇一	九,〇四二	九六,〇九	四,九八二	九,〇二二	八九,五八
同三十八年	六,四七七	六,一四四	一二,六二一	九,〇一八	九六,〇九	四,九八二	九,〇二二	八九,五八
同三十九年	六,五五八	六,三〇九	一二,八四七	九,〇一八	九六,〇九	四,九八二	九,〇二二	八九,五八
同四十年	八,三三八	七,九〇七	一六,二八八	九,〇一八	九六,〇九	五,〇二二	九,〇二二	八九,五八
同四十一年	八,〇五一	八,〇八八	一六,〇九九	九,〇一八	九六,〇九	五,〇二二	九,〇二二	八九,五八
同四十二年	八,七二一	八,四四七	一七,一六八	九,〇一八	九六,〇九	五,〇二二	九,〇二二	八九,五八
同四十三年	八,六八四	八,四四三	一七,一三六	九,〇一八	九六,〇九	五,〇二二	九,〇二二	八九,五八
同四十四年	六,五五八	六,五五五	一三,一一一	九,〇一八	九六,〇九	五,〇二二	九,〇二二	八九,五八
大正元年	六,七三一	六,三三五	一三,〇六六	九,〇一八	九六,〇九	五,〇二二	九,〇二二	八九,五八
同二年	七,二〇一	六,六九五	一三,八五六	九,〇一八	九六,〇九	五,〇二二	九,〇二二	八九,五八
同三年	七,八九九	七,三五四	一五,〇七三	九,〇一八	九六,〇九	五,〇二二	九,〇二二	八九,五八
同四年	八,二四五	七,七三三	一五,九八八	九,〇一八	九六,〇九	五,〇二二	九,〇二二	八九,五八
同五年	八,八三七	八,二二七	一六,〇六四	九,〇一八	九六,〇九	五,〇二二	九,〇二二	八九,五八
同六年	九,一四三	八,六〇二	一七,七四四	九,〇一八	九六,〇九	五,〇二二	九,〇二二	八九,五八
同七年	九,五五〇	九,〇三四	一八,〇〇四	九,〇一八	九六,〇九	五,〇二二	九,〇二二	八九,五八
同八年	一〇,二七六	九,七七八	一九,九九一	九,〇一八	九六,〇九	五,〇二二	九,〇二二	八九,五八
同九年	一一,八二九	一一,四四五	二二,二五四	九,〇一八	九六,〇九	五,〇二二	九,〇二二	八九,五八

長崎市歳出及小學教育費累年比較表

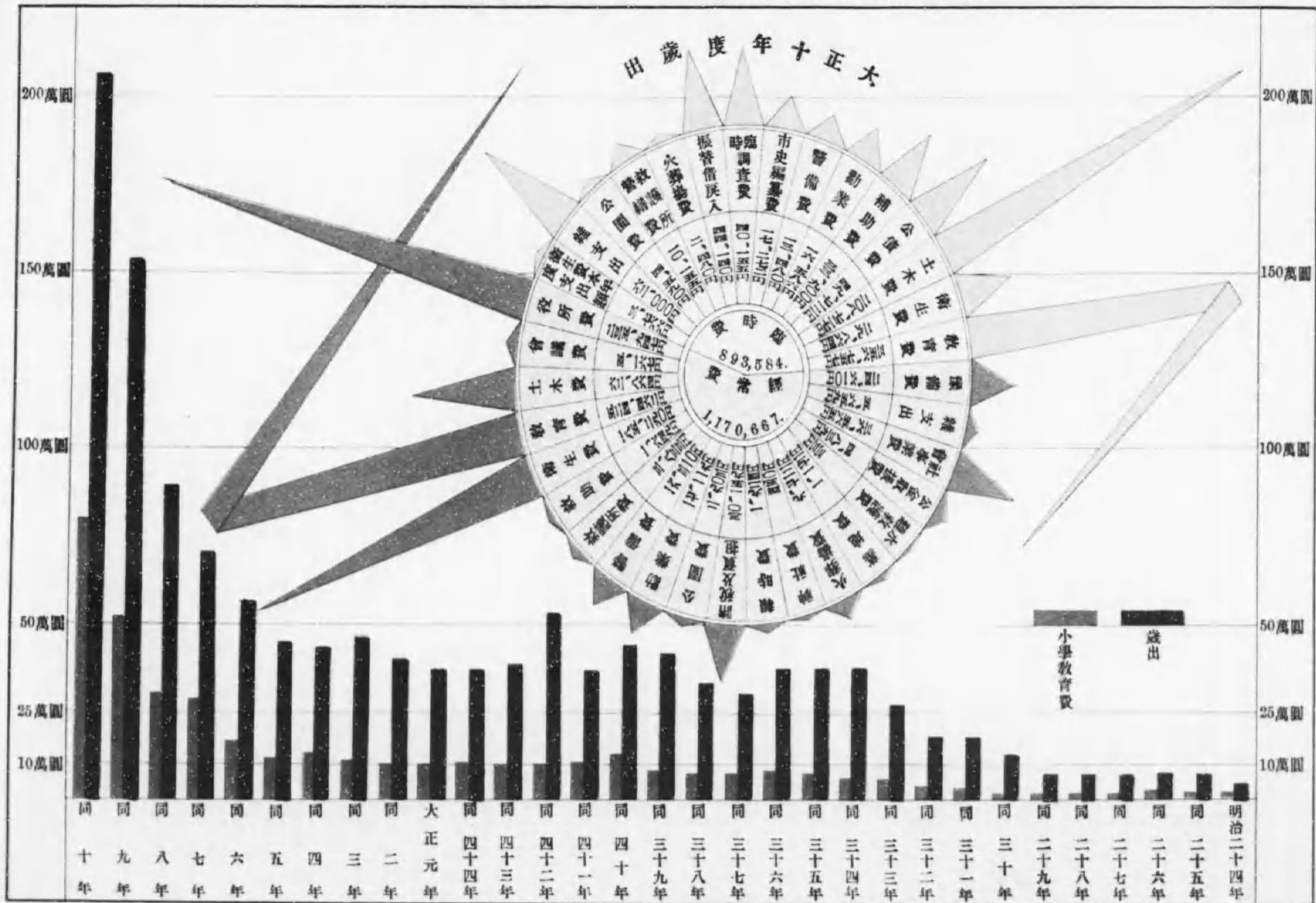
年次	市歳出	小學教育費		小學教育費ノ市費ニ對スル百分比	小學教育費一戸平均負擔額
		經常費	臨時費		
明治六年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同七年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同八年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同九年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同十年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同十一年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同十二年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同十三年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同十四年	二〇,九九五	五,四三三	六,二五	二八・六	〇・九五四
同十五年	二五,八〇一	七,六七三	三・八八	二八・七	一・四〇六
同十六年	二七,八一四	九,三九六	一・六五九	三九・九	一・五五
同十七年	三二,八五三	一〇,四四	五,八七〇	三二・九	二・三三七
同十八年	三八,〇七四	一二,四三	二,三三	三三・四	二・〇〇一
同十九年	四九,二四	不詳	不詳	三九・六	二・六
同二十年	不詳	不詳	不詳	不詳	一・六七
同二十一年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同二十二年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳

長崎市歳出及小學教育費累年比較表

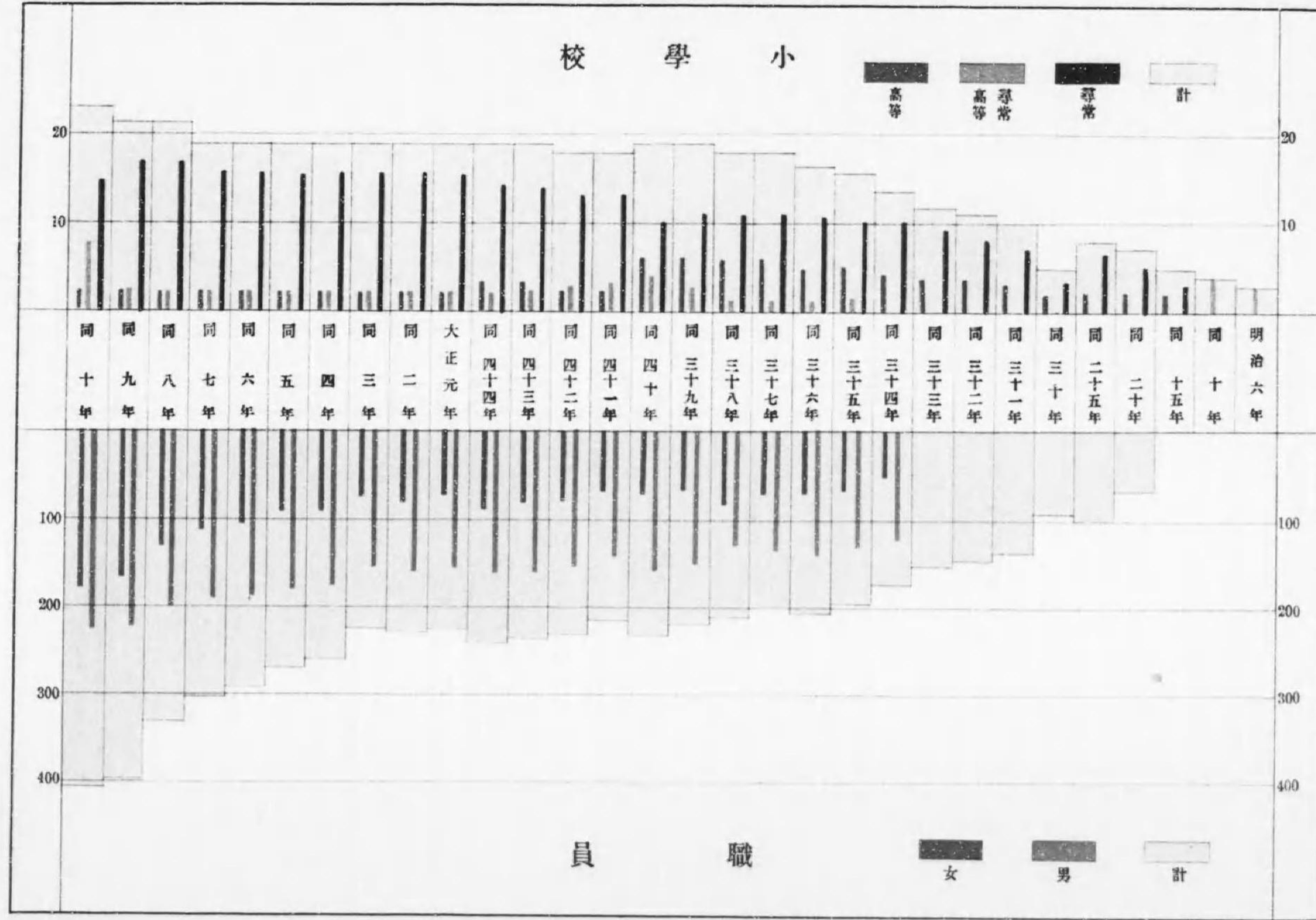
年次	市歳出	小學教育費		小學教育費ノ市費ニ對スル百分比	小學教育費一戸平均負擔額
		經常費	臨時費		
明治六年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同七年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同八年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同九年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同十年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同十一年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同十二年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同十三年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同十四年	三〇,九九五	五,四三三	六,二五	六・九	〇・九
同十五年	三三,八〇二	七,六七七	三六	三・九	一・四
同十六年	三七,八二四	九,三九六	一六九	五・九	一・五
同十七年	三二,八七五	一〇,四三三	五,八七五	三・九	一・五
同十八年	三六,〇七四	一一,四二四	二,三九	三・三	一・六
同十九年	四九,三二四	不詳	不詳	不詳	不詳
同二十年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同二十一年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同二十二年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同二十三年	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳
同二十四年	四三,一八四	三,三七七	一	三・三	一・四
同二十五年	四三,八四九	三,五〇九	一	三・三	一・四
同二十六年	四六,六三三	二,二四三	七,三七九	一・九	一・四
同二十七年	五八,三四四	一一,三四	一	一・九	一・八
同二十八年	六三,四四六	二,九六九	四,三九九	二・八	一・七
同二十九年	七〇,四〇八	三,八四四	一	三・八	一・七
同三十年	二二,八八九	一,四二二	三,九九〇	一・八	一・七
同三十一年	一六,八五五	二,一五九	一,三六	一・三	一・五
同三十二年	一六,八二四	三,七二一	九〇七	三・五	一・五
同三十三年	二六,三三六	四,三三三	五,〇一六	一・九	一・七
同三十四年	三三,〇六五	五,八三六	三,五	一・九	一・七
同三十五年	三七,三六一	六,四四七	五,九八	一・八	一・七
同三十六年	三三,九七三	七,一一二	四,六八	二・一	一・七
同三十七年	二九,五五三	六,八七九	一	二・三	一・七
同三十八年	三三,三二八	六,八二四	七,九九	二・一	一・七
同三十九年	四〇,〇八三	七,〇二五	五,〇八	一・九	一・七
同四十年	四三,三六五	八,九三二	八,一六七	二・〇	一・七
同四十一年	三六,〇三七	八,七五三	一七,七五	二・四	一・七
同四十二年	三三,六一五	八,九三六	一四,九六	二・七	一・七
同四十三年	三三,六九九	九,三三六	七,五	二・八	一・七
同四十四年	三三,九六九	九,一五二	六,八七	二・七	一・七
大正元年	三六,八七五	九,五三七	三,五五〇	二・六	一・七
同二年	三九,九六三	九,八二四	三,〇三七	二・五	一・七
同三年	四九,三〇八	九,六三七	一一,三三三	二・四	一・七
同四年	四三,二五二	一〇,七二二	二九,三六四	二・五	一・七
同五年	四三,七二六	一〇,五〇〇	一六,三五〇	二・四	一・七
同六年	五五,六一八	一一,四八八	四六,九九七	二・五	一・七
同七年	六九,〇三九	一二,四六四	八七,三〇〇	二・五	一・七
同八年	八二,四四六	一三,九六六	一七,五〇一	二・五	一・七
同九年	一,一三五,二四	一三,〇九三	一七,五〇一	二・五	一・七
同十年	二,〇六四,三五一	一三,〇〇七	三五六,七七七	二・五	一・七

備考 一、市歳出欄ニ記載セル金額ハ經常費臨時費ノ合計ナリ
 二、本表金額中市歳出ノ小學教育費八圓以下ヲ切捨テ圓ヲ以テ單位トセリ
 三、大正八年以降ハ豫算額ニシテ其ノ他ハ全部決算額ナリ

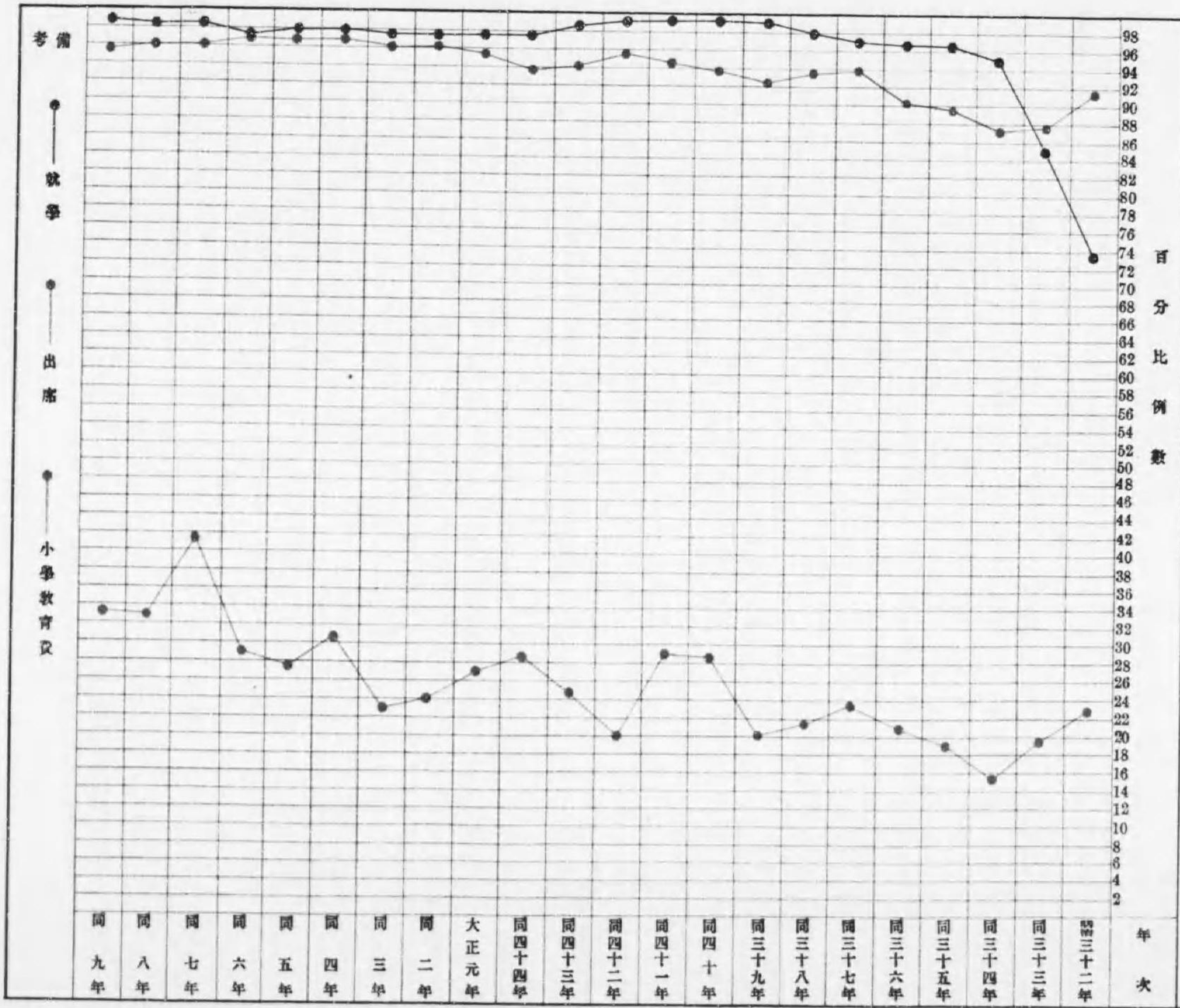
長崎市歲出及小教費年比比較



較比年累員職及校學小



就學出席及
 小學教育費ノ市費ニ對スル
 百分比累年比較表



大正十一年六月廿八日印刷
大正十一年六月廿八日發行

(非賣品)

長崎市小學校職員會發行

印刷人 朝川 勘太郎

長崎市本博多町一番地

印刷所 重 誠 舍

長崎市本博多町一番地

版印所 佐藤 弘聞堂

長崎市新町十一地



終

